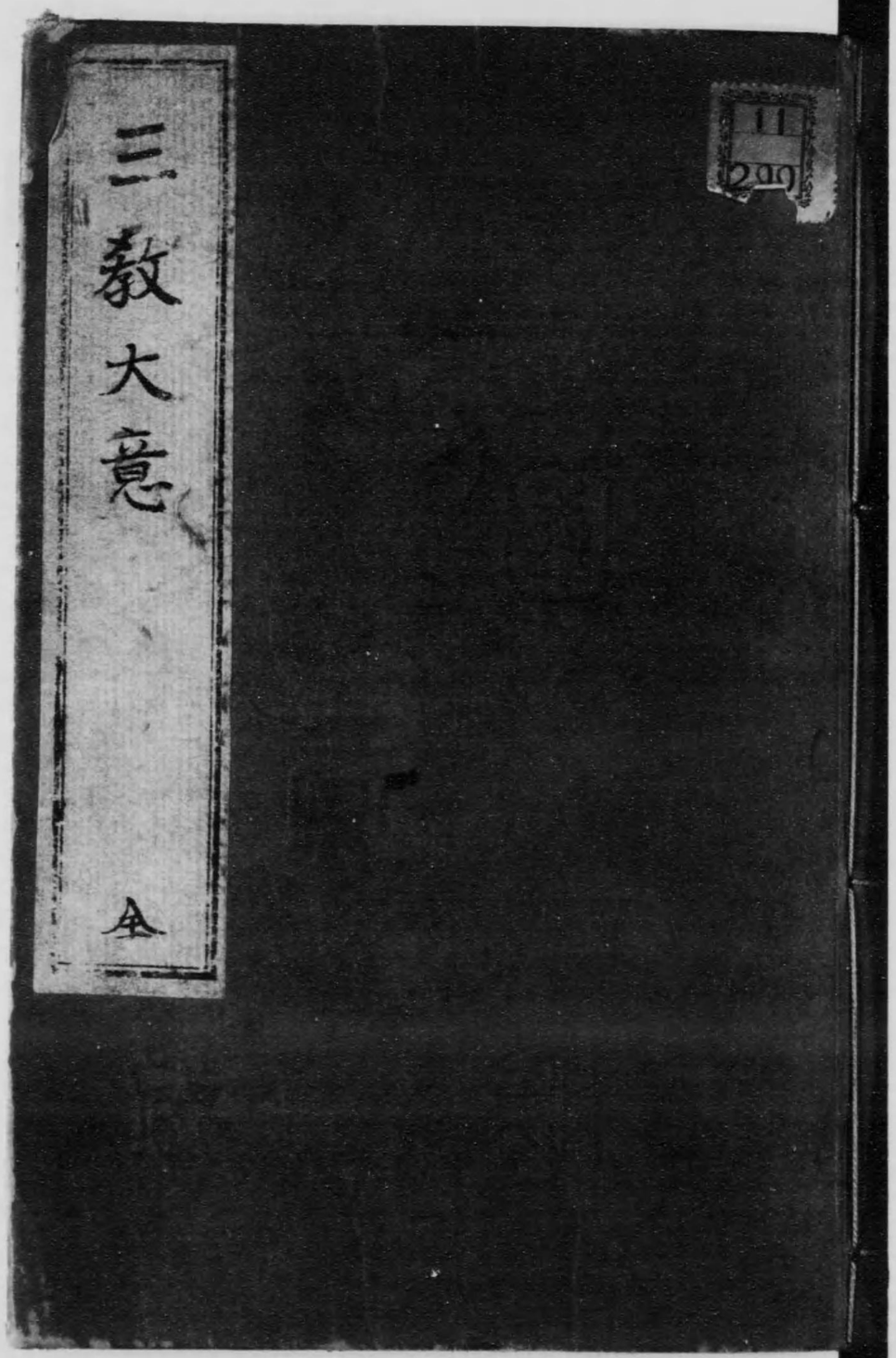

始

三教大意

11
299

寄贈
大正八年十二月七日
南雲庄八郎

帝國圖書館

帝國圖書館藏

三教大意

南雲庄之助稿

著者より贈本

大正
8. 12. 8
贈寄

三教大意

宗教論儒教編

- 本經
  - 孝行卷
  - 事物經
    - 修德卷
    - 君子卷
  - 誠意卷
  - 齊家卷
  - 天下卷
- 終始經
  - 率性卷
  - 脩道卷
  - 事教卷

基督教

- 創世紀
  - 聖靈書
  - 物質書
  - 造化書
- 舊約紀
  - 原魔書
  - 犯罪書
  - 地獄書
- 新約紀
  - 神使書
  - 懺悔書
  - 天國書

第一章　宗教論

宗教に幾通りも種類はあるが其最終目的は總て同樣である

其れは我々は最も善良なる者とならねばならぬと云ふことである

然らば如何にせば最も善良なる者となることが出来るか之は方法の問題で學説は三種に分れる

一は自力論で我々は各自自分の力でなるべきものであると云ふのである　一は他力論で自分では出来ぬから他の大なる力によらねばならぬと云ふのである　一は他力論で自力のみでも出来ぬ他人のみでも出来ぬ自他双方の力互に相待たねばならぬと云ふのである

此等の學説を標榜して立つ所の三大宗教がある

最も古い所の佛教は自力論である其次の儒教は他力論である最

も新らしい基督教は他力論である
斯のごとくして宗教は佛教と儒教と基督教との三大系統に分れる

一　佛教

佛教は我々は自力をもつて最も善良なる者とならねばならぬと云ふのである

今より三千年の昔印度に於て釈迦の説いた宗教である

此宗教は最も善良なる者を佛又は如来と称し佛に至らぬ者を衆生と云ひ一切の衆生は皆佛とならねばならぬと云ふのである其大目的である釈迦曰く毎に自ら是々念を作す何をはつて衆生をして無上道に入り速に佛身を成就することを得せしめんと故に一に又佛道と佛乗とも云ふのである

之が自力論である訳は斯うである釈迦が誕生する時四方地を行くこと七歩にして天上天下唯我独尊と獅子吼した

世の中のことは自分次第で何らにでもなる故自分が善いものは善いとなるのである詳言せば自分が善くなると悪くなると人を鬼とするも佛とするも世の中を地獄とするも極楽とするも皆自分次第であると云ふのである

然らば他人の力は全く無いのであるかと云ふに其れまで極端ではなく他人とても無のうて力はあるが単に補助に過ぎないものである

主力は飽までも自分である

二　儒教

儒教は我々は自分と他人と双方互に相待つて最も善良なる者とならねばならぬと云ふのである

今より二千五百年の昔支那に於て孔子の説いた宗教である

儒教に於て最も善良なる者を聖人と称し我々は聖人とならねばならぬと云ふのが其大目的である孔子曰く大なる哉堯の君たるかな巍々乎として唯天を大となす唯堯之に則る と其他堯舜湯文武周公等は皆古来の大聖人である故に一に又聖人の道とも云ふのである

我々は如何にせば聖人となることが出来るか顔淵曰く舜何人也予れ何人也と云ふは我々には遠ても聖人となるべき天賦の素質が自然に具はつて居ると云ふのである孟子曰く堯の服を服し堯の言を誦し堯の行を行ふ是れ堯なるのみと云ふは我々に自然具はつて居る聖人の素質も其修行を棄てゝ置いては聖人になれないから其所は聖人を手本として之を学ばねばならぬと云ふのである故に堯舜湯文武周公等は我々の師匠である我々は其弟子である同じ道理で我々は現世の師匠である後世は我々の弟子である

是れ則ち儒教の忠力論たる所以である

三　基督教

基督教は我々は他の大なる力によつて最も善良なる者とならねばならぬと云ふのである

今より二千年の昔パレスチネに於て耶蘇の説いた宗教である

此宗教に於て最も善良なる者を天国の者と称し我々は天国に入らねばならぬと云ふのが其大目的である

耶蘇曰く心の貧き者は福なり天国は即ち其人の有なればなりと心が貧しいとは我々は無能無力であると悲観することである換言すれば世の中のことは皆全智全能なる神の仕業であると信ずることである故に我々は天国にのるには心を貧くし神の絶大なる力によ

って救い上げて置ふの外はない耶蘇は十字架の上にて大声を発し我神よ々何ぞ我を棄て給ふやと叫んで息が絶えたのである

之の此宗教の他力論である所以である

又斯のごとく神とそわうとの厳然たる此宗教の中心であるが故に一に又神の道とも神の教とも云わるのである

然らば我々人間は絶体の無力であるかと云ふに是れ亦た我々は神に向って救を求むる丈の事は為さねばならぬ天自ら助くる者を助くである

第二章　仏教編

仏教は我々一切衆生は自力をはげみて仏如来とならねばならぬと云ふのである

然るに我々衆生の地位より仏如来に至るまでには三大階級がありて其れを順次に踏み昇らねばならぬ法華経の譬喩品に曰く一仏乗に於て分別して三と説くと又曰く三乗の声聞辟支仏仏乗を得へしと声聞乗は小乗しかも云ふ辟支仏乗は縁大乗ともいふ仏乗は菩大乗と云ふのである

声聞乗は自己の迷を離し所の俗業である権大乗は他人の迷を離れしめ自己に真正の智識を積む所の俗業である菩大乗は他の一切衆生をして真正の智識を積ましむる所の俗業である

仏教は如来と各自自力で仏如来となることなれば他人の世話には

及ぼす事の様であるけれども佛如来の伝如来たる所には他人を
も佛如来たらしむるに在るのであると云ふのは善良の人であるに
は他人をも善良たらしむるから善良なのである自分は
かり善良で他人を顧みないのは真の善良ではないのである
斯のごとくして佛教は声聞乗と縁覚乗と菩薩乗との三乗に分れる

一　声聞乗

声聞乗は我々凡夫が自己の迷を離し所の仏教である
醍醐品にはく迷に三界を出ずと歌し自ら涅槃を求む是を声聞
乗と名くと三界を出つるとは迷の境界より脱出す
ること自ら涅槃を求むるとは自分先ず清浄無垢の境界に入らむとす
ること

此迷を去ることの第一に必要な訳は迷つた間違つた考を持つて
居る間は真正の良い智識はいくら聞いても到底耳に入らないから
である喩えに埃や塵に穢れて居ては着物はかり立派なものを着
て清潔張り駄目であると同じ様なものである故に此場合先ず湯に
入り其垢や塵をすつかり洗い流して清浄無垢の生地にならねばな
らぬ訳である

其れであるから此声聞乗では我々の考は何も虚妄も間違て我々
の見た様り聞たりする所のものは何も無い様も無いと云ふ様に一
切合切總て打消の一点張で唯一意専心世の中の大根元に向つて猛
進するのみである

之が即ち小乗と今日の学校で云へば小学校の修業と云ふ訳であ
る

二　縁覚乗

権大乗は他人をして其栄を離れしめ自己に真正の智識を積む所の修業である

之はすべから清浄無垢の生地になってから立派な衣冠束帯を着ける様なものである

聖論品に曰く自然慧を求め獨りの喜楽を楽み常に諸法の因縁を知る是を辟支仏乗と名くと自然慧とは真正の智識のこと獨喜楽とは他人の世話よりも自分一身の修業は大切であるといふこと故に此場合他人をして迷を離れしむる修業の説明を省くことゝする常く諸法の因縁を知るとは矢張り自然慧のこと

斯くて権大乗の修業の話さは前の声聞乗とは全く正反対になるのである前の声聞乗では世界組織の根元に心づいて修行一点張で遂さいたるが茲の権大乗では其根元より逆に続いて世界一切の箇体に向ひ積極的の肯定一点張で廣かつて行くのである其れと云ふのは世界の根元は一つであるが其一つの根元より枝が岐れ花が咲いて種々無限の差別を生ずるからである故に枝の見る所聞くもの行も有る枝も有る枝の考へも真正なも真正と云ふ訳である

之を今日の学校で云へば大学校の修業である

三　賢大乗

賢大乗は他人の一切衆生をして真正の智識を積むべき所の修業である

聖論品に曰く無量の衆生を慈念し安楽せしめ天人を利益し一切を度脱す之を大乗と名つくと無量の衆生とは天と云ひ人と云ひ一切とは階級の差別を要するに一切衆生とする慈念と云ひ安楽と云ひ利益と云ひ度脱と云ふのは之も程度の差別を要する

に之を信度することで結局は佛如来たらしむることである。

佛教の自力主義は是まても及ぼして居るのである自分が自分で佛如来となるはずのものでなく他の一切衆生までも我自力をはたらかせて之を佛如来たらしむることが出来る。これが佛教の最終目的である

此資本主義は大學校を卒業したから社會に立つて實際の職業に従事する様なものと最早學校の生徒でなく學校の先生と云ふ方である

第三章　声聞乗

声聞乗は我々衆生は自己の迷を離れて清淨になるまでの修業である

之にも尚細別の中階段があつて我々は是順次に踏み昇らねばならぬ

佛教では道德の程度を最下から最上まで中段の境界に分けてある地獄界餓鬼界畜生界修羅界人間界天界声聞界縁覚界菩薩界佛陀界である此十界の前半五界は惡德の方で後半五界は善德の方である

茲に注意すべきことは此十界の中には其名の如く形ちの上で云ふ所の畜生も人間も食べさせるのであるが偖しなから其本体は道德の区別であつて畜生界の人間も人間の中にも道德上此十界の区別がある

ることである

其所で声聞界は此十界の内地獄界乃至声聞界の七ヶ階段を含むのであるけれども此内人間以下の五界は総て悪縁の方で一之を区別するの必要がないから今之を一纏めにして畜生界と称する此三教大意は下等の方面より上等の方面を主とするのである其ようなると声聞界は畜生界諸天界声聞界の三ヶ階段となる

畜生界は迷の内に在る所の境界である諸天界は幾分か迷を離れた所の境界である声聞界は全然迷を離れた所の境界である

斯のごとくして声聞界は畜生界と諸天界と声聞界との三界に分れる

一　畜生界

畜生界は全然迷の内に在る所の境界である

悪徳の方で未だ毫も仏門にのらぬ者を称して外道とも俗人とも凡夫とも云ふのである

間違つた考を持つて居なかから更に之が疑をさへ起さず唯少しも迷つて居ないと云ふ様に頑もして其間違を固く信じて居るのである迷信である

孟子滕文公の篇に曰く猪子蚕桑を事とせざるに非ざれば能く衣を得ず知らず識かず怖ちず火来つて身に逼り苦痛已れを切むるもの に厭患せず出つるを求むるの意なりと之れは畜生の迷信の有様を喩えたのである

二　諸天界

諸天界は幾分か迷を離れた所の境界である

漸く仏門に帰依したので天上とも云ひ又単に天とも云ふのである

る梵天帝釈天昆侍門天の類である。

自分の考の間違に氣がついて疑を起し研究を始めたので幾分迷を離脱すると同時に縛が真理に悟の生る所の境界である。

三　声聞界

声聞界は全然迷を離れて清浄になった所の境界である

声聞は又羅漢とも阿羅漢とも呼ばれ大弟子とも云ふのである

十六羅漢二十一羅漢五百羅漢などとしてある

法華経に曰く声聞を求める者の為めには應ぜる四諦の法を説いて生老病死を度し涅槃と究竟すなわち此涅槃と云ふのは即ち迷の世界の全然晴れた所の真如清浄の境界で一切の萬物の種を植えて

倣相を脱した所の真相本体のことである

此声聞の一段は小乘教の教義で信に立を大悟徹底と云ふのである

るが出世して立へは声聞界とも羅漢界とも無生法忍とも八不二法門とも禪定の禪味がある。

第四章　衆生界

衆生界は迷の内に居って之を迷に非ずと信じて居る所の境界である

其迷信の数を挙くれば八萬四千の煩悩なれども之を様なことも有るが結局事物空間時間の三方面より三種に大別することが出来るのである

事物に関する迷信は差別の妄想である空間に関する迷信は我執の執着である時間に関する迷信は生死の煩悩である

斯のごとくして衆生界は差別の妄想と我執の執着と生死の煩悩との三種に分れる

一　差別の妄想

差別の妄想は衆生の事物上の迷信である

差別と云うのは物の種類の様々と違って居ること妄想は間違った考の事である衆生は世の中に在る種々様々の事物は皆其根本から違った種類のものであると誤信して居る

衆生は此等の差別は假相であると云うことを知らないから間違である故に此等の差別は何らしても同様にはならぬ甲は乙となり乙は甲となることは出来ぬ仏如来は本来からの衆生である仏如来は衆生となることは出来ぬ如来である衆生は本来からの衆生である仏如来は衆生となることもなければ衆生は仏如来となることも出来ぬ善人は厭まれても善人である悪人は厭まれても悪人である

斯くて衆生は自分等は善人となれないから善いことの出来ないのは当然であると云う様に思って居る

二　我執の執着

我執の執着は衆生の空間上の迷信である
我執の我は他人のこと我は自分のこと執着とこゝのは衆生は自
分と他人との区別と云ふ所に執着して居ること
衆生は自分の利益は他人の為めには不利益である他人の利益は
自分の為めには不利益であると考へ互に敵視反目して其間に戒律
と種々割拠分離とする
此等は衆生が互に相融和し難き病である維摩経に曰く病の起る
は皆我に着するに由ると

三　生死の煩悩

生死の煩悩は衆生の時間上の迷信である
生死は我々の生れると死ぬるとである煩悩は迷の為めに苦しむ
こと維摩経観衆生品に曰く生死に畏れありと衆生は我々は生れぬ
前には無かりしに死に後には無いのに唯生きて居る間限りの
自分と思ふ生命ですらと思つて居る
故に衆生の生活が楽でもつて苦みのない時には何時までも生き
て居たい死に度ないと思つてたとへ死すべき時が来ても如何にも
して生きて居たい死に度ない死ぬより恐ろしいことはないと思つ
て居る
之に反して其身の苦しい時になると生きて居るのが厭になり死
すれば楽もないからには苦もなくなるものと思つて死て仕舞い度
くなつて自殺をしたり云わば営遠いなことをするのである
衆生は我々の生命は常住であることを知らぬのである

第五章　諸天界

諸天界は幾分迷を離れ幾分真理に悟へる所の境界である

諸天の悟入は発生の迷信と相対照して矢張り三方面より看察することが出来る

事物上の差別の妄想に対しては四大五蘊の悟入である空間上の執著に対しては諸法無我の悟入である時間上の七死の煩悩に対しては諸行無常の悟入である

斯の如くして諸天界は四大五蘊と諸法無我と諸行無常との三種に分れる

一　四大五蘊

四大五蘊は諸天の事物上の悟入である

四大とは世の中を構成する所の地水火風の四大元素のことと五蘊とは俗に色受想行識の五大元素のことで古屋と云って俗に色声香味触法の六大元素である

此等は何れも事物の元素の区別であるが其四大と云ひ五大六大と云ふのは唯区別の標準が違ふのみで其元素は全く同様であるから結局大同小異である

其元素と云ふのは世の中の事物には種々様々に無限の差別があるけれども其れは皆此四大又は五大等に過ぎざる少数元素の混合と来ひに其混合の割合とによりて生ずるものであるから此等少数の元素それにして世の中には何物もないことに帰着する

二　諸法無我

諸法無我は諸天の空間上の悟入である

諸法とは宇宙間の一切の萬物である。無我とは我も自分も他人と云ふものは無いと云ふことである。從つて我に對する彼我も他人と云ふものも考へる。從つて自分も他人も区別も区別は猶更ないと云ふことになる。

何故とならば其我は我なしと云ふ所一切の萬物は皆四大が寄り集まつて居るに過ぎない。單純な形狀を捉へて假に我なしと云ふなと附けたものである。全くの空名である。喧しい。本来實のないものである。

其証拠には我が死ねば明かに判る。直ぐ新屍と云つて直ぐ分る。四大に帰つて仕舞つて其所には全く自分も他人もないのである。

維摩経に曰く四大合するが故に假に名けて身と為す四大は主なし

此身も亦我なし又曰く是身は我なし火のごとし と為す。

三　諸行無常

諸行無常は諸天の時間上の悟入である。

諸行とは一切の森羅萬象のことである。前の諸法と云ふと同じである。

が喧しいと云ふは空間の上のことを云ふたるに諸行と云ふは時間の上のことを云つたものである。

無常と云ふのは一切の萬象は絶えず変化することである。常に一定不変の有様を云はないことのみを云ふ。其変化の有様は一瞬間の絶えず続くことを生滅変化と云ふ。生は発生の有様を盛大になること。滅は衰亡に成ること。死は消滅する所の有様を体みな一つに纏めて云ふと云つてある。

維摩経に曰く是の身は空無なり空なし速に朽ちる法なり

信ずべからざるなり

第六章　聲聞界

聲聞界は全然迷を離れて清淨となり涅槃真如の悟を開いた所の境界である

涅槃真如の如何なるものとなるかは矢張り衆生の迷信淫欲の悟入と対照して三方面より看察することが出来る

事物の方面から之は一切平等無差別である空間の方面から之は不增不減である時間の方面から之は常住不生不滅である

斯の如くして聲聞界は一切平等無差別と不增不減と常住不生不滅との三種に分れる

一　一切平等無差別

一切平等無差別は真如涅槃の事物上の性質である

世の中の事物は種々様々で無限に多くの種類はあるが其結局の

根本第一義の真如に至ると云ふ。總て悉く平等無差別の一元になつて仏舞つて今は四大五蘊の差別なく全然一様一味のものとなるのである

是れまでは色は利つたが然るに其一様である所の真如なるものは常一不変であると云ふ同時に利り憎いものになつて色を認めれてある大別五つ位の学説に分れる

其一は無なりとの説である曰く諸法は空なりと空とは無のことである故の中の一切の事物は皆悉空無なるものい妄閑たりのであるとこゝのである

其二は有なりとの説である真言宗に云ふ所の法身なるものは一切の活動する本源で妄動が真如であるとこゝ心持から又華厳宗に云ふ所の事々無礙法界なるものは大の地のもの水の流れも一つ一つのであると云ふ意味かも

其三は無にして有なりとの説である真如は無でもあり有でもある無と同時に有であるとこゝ心ことである般若心経に曰く色は空に異なる空は色に異ならず色は即ち是れ空なり空は即ち是れ色なりと色とは有のこと空とは無のことである

其四は無に非ず有に非ずとの説である真如は無でもなければ有でもなく又無と同時に有でもないと云ふのである維摩経に曰く法は有ならず又無ならずと然るに仏舞つてあるかと云ふと天台宗に空仮中と云ふことがある空とは無のこと仮とは仏相の有ること中とは其中間のこと即ち真如は空の無にもあらず仮の有にもあらず其中間の中であると云ふのである

其五は言い難しとの説である。真如は無にもあらず又有にもあらず又無にして有なるにもあらず又無に非ず有に非ざるにもあらず。結局言い難しとなすのである。之は禅宗の教外別傳といふのと要する自分が自分で自得せねばならぬのである。

と堂々と一げきを加へた。

の問答と離れと又曰く維摩は默然として言なしと。法華経に曰く諸法寂滅の相は言を以て宣ぶべからずと。

二　不増不減

不増不減は真如涅槃の空間上の性質である。

真如は増しも減ずもなく一定不動のものである。維摩経に曰く法は増減なしと。般若心経に曰く諸法空の相は不増不減なりと。

世間の事物は或は増し或は減じ或は動じ或は動じ事動極まりなしと雖も其れは唯相対として同一形ちを為す場合の増減であり其実質たる真如の増減ではない。喩へば海上の波のごとくなるも水なるかなりしかも其れは波といふ仮相の増減に過ぎないのと実質たる水の分量は常に一定して更に増減がない。と同様である。

三　常住不生不滅

常住不生不滅は真如涅槃の時間上の性質である。

真如は始なく昔より終なく未来に至るまで一瞬間の間断も無く引続き絶えず存在して居ると云ふのが常住である。従って新に生ずることもなければ滅することもなく、と云ふのが不生不滅である。般若心経に曰く是の諸法空の相は不生不滅なりと維摩経に曰く諸法は畢竟にして不生不滅なり是れ無常の義なりと。

之も仮相なる世の現象は其生死流転即ち発生滅亡愚者識者の存在を繰り返して絶えずなるものとして仮に其根本実質の真如と共に発生滅亡を繰り返すのなく真如に依相の如何に拘はらず依然として存続するのである

第七章　権大乗

権大乗は我々は真正の智識を研究して之を會得するまでの修業である

此修業は仏教の道徳十界の内最後の三界即ち縁覚界菩薩界仏陀界に於くするのである

縁覚界は真正なる智識の端緒を覺る所の境界とする菩薩界は真正の智識自体を研究する所の境界である仏陀界は真正の智識全部を究め尽した所の境界である

斯のごとく権大乗は縁覚界と菩薩界と仏陀界との三界に分れる

一　縁覚界

縁覚界は真正なる智識の端緒を覺る所の境界である

真正の智識の諸縁と云ふのは諸法のせする因縁である真因縁と覺るのが縁覺である縁覺を獨覺と云ふのは辟支佛と云ふのである

法華經の序品に曰く辟支佛を求むる者の為めには應ぜる十二因緣の法を說くと十二因緣は又十二緣起とも云つて一元の真如より起つてなかれ此花が咲いて種を無限の差別位相即ち諸法のせする訳である現出してある又略して因緣果報とも云ふ更に略して單に因緣と云ふのである

之が今日の學校で云へば大學の入門である

二　菩薩界

菩薩界は真正の智識自体を研究する所の境界である

之は因緣によりて生じたる一切諸法の實相即ち無限の差別の實相を知得する研究である法華經の序品に曰く諸の菩薩の為めに

は應ぜる六波羅蜜を說いて阿耨多羅三藐三菩提を得せしめ一切種智を成ぜ佛慧を究竟せしむと此の一切種智とは即ち真正の智識諸法の實相と又一切智佛智佛知見佛智慧佛知見大般若波羅蜜多阿耨多羅三藐三菩提心なと、云ふ種々の名稱があるが要するに一つものである

即ち世界一切のことを總て知らさる所なきの有様になろうとするのであつて大要な研究である馬渡先生と一切合切總ての事と細大となく之を知り盡すと云ふことは如何に勉強しても出来難いことの様に思はれる但一なから一を聞いて十を知ると云ふことあるのである一を聞いて百を知ることも出来ない訳でなく從つて一を聞いて千を知り萬を知る位の様になつたら同種類の多い世の中のことであるから次々と出来ないことは云はれない

のである。

三　佛陀界

佛陀界は真正の智識全知を究め盡した所の境界である

即ち一切種智を得たる所である之は大學校の卒業と云ふ一さ所で苦事皆為世界一切全知見さるなく聞かさるなく知らさるなさる有様である

斯うなると軍化の美德まんか兼ね具けんて来て六波羅蜜慈悲喜捨三十二相七十種好紫磨金色千力四無所畏四攝法十八不共神通道力成等正覺等を具足するに至るのである

又其名稱なども十号と云つて如来應供正徧知明行足善逝世間解無上師調御丈夫天人師佛世尊と云ふ澤山の稱號がある

第八章　緣覺界

緣覺界は真正なる智識の端緒即ち諸法の生ずる因緣を覺る所の境界である

因緣の種類はいくつにも分けることが出来る法華經の方便品にいく所謂諸法とは如是相如是性如是体如是力如是作如是因如是緣如是果如是報云々と云は合計九種に別けたりのである此九種を更に三大種に類聚することが出来る

事物に関する因緣は体と性と相とである空間に関する因緣は力と緣と報とである時間に関する因緣は因と作と果とである

斯の如く一切緣覺界は体性相と力緣報と因作果との三種に分ける

一　体性相

体性相は事物に関する因縁である。
体は本体実体の体と云事無尽刹の真如真性の有様で未だ仮相に
表現せざる所を云ふのである。
性と云ふのは其本体より特に仮相となって現はれ出てきたとする
所の個別的を指すのである。
相と云ふのは其既に仮相となって現はれ出た所の種々様々な
る一切の事物である。
故に真如が虚い方に前せば水となって現はれ熱い方に前せば火
となって現はれ出る様な次第である例之ば水は真如の体である
其れが内の持ちて冷い方を起して凍りなりするのは
性である従って善事を行ひ悪事を行ふが如きものは相である。

二　力縁報

力縁報は空間に関する因縁である。
力は今日物理学と云ふ所の勢力の如きものであるが之も矢張り
不滅不増の真如と指したりのと未だ何等の運動をも起さない所の
状態である。
縁と云ふのは其勢力を発動せしめる所の媒介である。
報と云ふのは其媒介によって既に運動となって現はれ出た所
の種々の形態である。
故に力が水の媒介によって現はれ出つれば水車の運動となり風
の媒介によって現はれ出つれば帆を挙して船を走らす様な次第
である。又例之ば石は力である其他人に対する所の行いは縁である
従って世人が之に應じて為す所の行いは報である。

三　因作果

因作果は時間に関する因縁である

因は因果の因即ち原因結果の原因である。今は普通にいふ所の原因とは頗る其趣を異にする普通にいふ所の原因は矢張り或る事目に解する所の現象を指すものと其点は原因と結果と同様と唯其違ふ所は時に於て前後の関係に在る丈の区別に過ぎない例へば[illegible]に例証にいふ所の原因は其れとは全く異なりて或る事目に解れて来る所の第一の原因と指したりのと是れ丈た所謂常住不生不滅の真如のことである

作とは其外一の原因より将に結果を発作せんとする所の作用である

果は即ち或る事目に解する所の結果と作によりて生ずる所の一切の現象である

故に常住不生不滅の原因より無常発作のほか起り立より生起花の種子無明の事物かせする例之は或るは第一の原因である或る種子の行ひが作用である此作用に続いて来たる所の種子の変遷即ち善悪因果紆に書いてあるのは其結果である

第九章　菩薩界

菩薩界は諸法の実相を研究し真理の智識を得りとする所の境界である。

之れは菩薩所行之道として大変な研究である法華経の聖教品に書いてある所を見ると釈迦の舎利弗に記を授けて居る此経には今日の学校と云へば卒業証書である様な訳で今日のは段に卒業して舎利弗よりも一層か釈迦のは過去も現在も未来も總て無一物である。

曰く舎利弗よ汝未来世に於て無量無辺不可思議劫を過ぎて若干千億仏の所を供養し正法を奉持し菩薩所行之道を具足して當に仏となることを得べし。

而して三種に大別することが出来る。

正法の奉持は事物上の修業である若干千億仏の供養は空間上の修業と親近供養とこれである無量無辺不可思議劫は時間上の修業と勤加精進とこれである。

斯の如くして菩薩界は正法の奉持と親近供養と勤加精進との三種に分れる。

一　正法奉持

正法の奉持は事物上に於ける菩薩所行之道である。

正法とは諸法の實相即ち真正の智識である奉持とは之を忘れぬ様大切に記憶して居ることである其方法としては支持讀誦解説書写等の類と法華経の中に明瞭に示してある。

今其一二の例を引用する安楽行品に曰く斯の経典を支持し読誦せむ者は嫉妬諂誑の心を懐くこと無れ亦伽藍を堅山谷を転賞し其長短を説かることなれと又曰く是の第三の安楽行を成就する

有らむ者は是の法を説くの時に能く他乱するもの無く恒日夜の共に是の経を読誦すると得む亦大衆の中かも為って聴受し聴受せって能く持し持して能く読み読して能く説き説き説いて能く書き書くは人をして書かしめ経巻を供養し恭敬尊重讃歎すると得むと

二　親近供養

親近供養は空間上に於ける菩薩行を道てある

如来の知見即ち諸法の実相は広大深遠なるから諸の菩薩は十方の諸国土に於て法を演ぶる所に若干千億の諸仏に親近し師事し供養し其法を聞かねばならぬ

諸章経の序品に書くある曰く尚の時に弥勒菩薩は是の念を作さく今は世尊は神変の相を現ず何の因縁をはて斯の瑞あるか今仏世尊は三昧に入れり是の不可思議に希有の事を現ずる当に誰に問わへき誰か能く答わる者ぞと復た此の念を作す是の文殊師利法王のよはせに当に過去の無量の諸仏に親近供養したり此の希有の相を見しなるへし我今当に問ふへしと云ふと即ち此文殊師利のごく無量の諸仏に親近供養とねばならぬのてある

三　勤加精進

勤加精進は時間上に於ける菩薩行の道てある

勤加は勉励すること精進は熱心なることて一切種智を得むが為めには無量無辺不可思議劫と云う永い間熱心に勉励せねばならぬ

方便品に曰く爾の時に世尊は三昧より安詳として起つて舎利弗に告く諸仏の智慧は甚だ深く無量なり其の智慧の門は解し難く入

り難し一切の声聞や辟支佛の知る能はざる所なり所には何を佛は
宣べ百千萬億無数の諸佛に親近し畫く諸佛の無量の道法を行じ甚
深微妙にして名稱普く聞え甚深にして未だ曾へ有らざるの法を成
就したりと又提婆達多品に曰く爾の時に佛は諸の菩薩及び天人
四衆に告げたまはく過去無量劫の中に於て法華経を説いて懈倦有る
なく多劫の中に於て常に閻浮提を為して無上菩提を求めて
心に退轉なかりき亦た嫉妬なく時に聚事することを千歳を経る
も諸の衆生の故に精勤して経典を供養すと又曰く釈迦牟尼佛は文殊師利
に向かって言く此の経は甚だ深く微妙にして諸経の中の寶なり世に
希有なる所なり頻しば発生の勤かを精進し此経を修行して速に佛を得
ることを得たりと文殊師利に告く有る人ありて能く釈迦牟尼佛の
如来を見るに無量劫に於て難行苦行し功を積み德を累ねて之を然
る後乃ち菩提の道を成ずることを得たりと

第十章　佛陀界

佛陀界は真正の智識全知即ち一切種智を得たる所の境界である。
佛陀の一切種智は三方面より看察することが出来る。
事物上より之へは一切無偏の智識である空間上より之へは十方無限の透見である時間上より之へは古今未三世の洞察である
斯のかくして佛陀界は一切無偏智と十方透見と三世洞察との三種に分れる。

一　一切無偏智

一切無偏智は事物上の一切種智である。
一切種智に於ては吾人日常普通の事は之上さんもなく卑のなる物体なれども可思議なものの数と事とも纏と綜然として利つて居らないとこよりのはないのである。

法華経の序品に曰く爾の時に世尊は四衆に囲繞せられ供養恭敬尊重讃歎せられて諸の菩薩の為めに大乗経の無量義教菩薩法佛所護念と名つくると説く佛は此経を説き已って結跏趺坐して無量義處三昧にのり身体動ぜず是の時天より曼陀羅華摩訶曼陀羅華曼殊沙華摩訶曼殊沙華を雨らして佛の上及び諸の大衆に散じ普佛世界は六種に震動す爾の時に會中の比丘比丘尼優婆塞優婆夷天龍夜叉乾闥婆阿修羅迦楼羅緊那羅摩睺羅伽人非人及び諸の小王轉輪聖王是の諸の大衆は未曾有なりと得て歓喜し合掌して一心に佛を観る爾の時に佛は眉間の白毫相の光を放ち東方萬八千の世界を照し周徧せざるなく下は阿鼻地獄に至り上は阿迦尼吒天に至る此世界に於て盡く彼の土の六趣の衆生を見又彼の土の現在の諸佛を見及び諸佛の説く所の経法を聞き兼ねて彼の諸の比丘比丘尼優婆塞優婆

堅実の行の修行し得道するのを見徳仏諸の菩薩摩訶薩の種々の
因縁種々信解種々の相貌をもつて菩薩の道を行ずると見徳仏諸仏
の般涅槃す者を見徳仏諸仏の般涅槃の後仏舎利をもつて七寶の塔
を起つるを見ること

二　十方透見

十方透見は空間上の一切種智である
十方とは東西南北四維上下をいふ要するに国土全部である其十
方を無礙の眼をもつて明かに見透すのである
見寶塔品に曰く仏は白毫の一光を放つ東方五百萬億那由他
恒河沙等の国土の諸仏を見る彼の諸仏の国土は皆頗黎をもつて地となる
し寶樹寶衣を以て莊嚴となる無數千萬億の菩薩は其中に充滿せり
縁く寶幡を懸つて宮殿を上に羅り彼の国の諸仏は大聲音をもつ
て而して諸法を說く及び無量千萬億の菩薩の諸国に徧滿して衆
為めに法を說くを見る南西北の方も四維も上下も亦是相の光の照
す所の處は亦復た斯の如しと

三　三世の洞察

三世の洞察は時間上の一切種智である
三世とは過去現在未来をいふ過去とは仏に古いことを未来とは如
何に遠くとも明瞭に之を洞察するのである
化城喩品に曰く仏は諸の比丘に告げ乃往過去無量無邊不可思議
阿僧祇劫に仏有り大通智勝如来と名く其国を好成と名く劫を大相
と名く諸の比丘よ彼の仏の滅度より已来甚大久遠なり此間に其久
遠の長さを譬へいて三千大千世界を微塵に碎いて之を一劫と云ふ計算法
か書いてある続いて曰く我如来の知見力をもつての故に彼の久遠を

見ることゝ猶ふ今日のぬしと之は過去の方てある。

又未来の方にはいては譬喩品に曰く舎利弗よ汝未来世に於て無量無辺不可思議劫を過して華光如来となる其華光仏は壽十二小劫ならむ王子となりし未だ仏とならざる時と陋くなり其国の人民は壽八小劫ならむ華光如来は十二小劫を過きて堅満菩薩に阿耨多羅三藐三菩提の記を授けて諸の比丘に告げむ是の堅満菩薩は次に當に仏と為るへし號して華足安行多陀阿伽度阿羅訶三藐三仏陀と曰はむ其仏の国土もまた復た是のぬくなりもし舎利弗よ是の華光仏の滅度の後正法世に住すること三十二小劫像法世に住すること亦三十二小劫ならむと。

第十一章　實大乗

實大乗は我々は仏如来となりて他の一切衆生を救ふ為に悉く真正の智識を會得せしむる所の修業である。

仏教の大目的は既に在るの通に仏如来となりた所の我々は一切衆生の大施主となり我々の後より仏如来となる人々所の後輩に説法を為し終に一切衆生をして悉く仏如来たらしむるものにて一大仏国の世界を現出せねばならぬのである故に実大乗にもまた施主界説法界仏国界の三小階段がある。

施主界は従来の仏如来である説法界は將来開かる所の仏如来である仏国界は一切衆生悉くすべて仏如来である。

斯のぬくしと実大乗は施主界と説法界と仏国界との三界に分れる。

一　施主界

施主界は從來の佛如來の境界である

自分が佛如來となれば更に他の一切衆生をして佛如來ならしむるの責任が生ずる之は大悲校を卒業して社會に立つたのち即ち大學の講師である

嚩日羅品に曰く如來は大悲堅固より諸の怪格なる所なし能く衆生に佛智慧如來の智慧自然の智慧を與ふ如來は是れ一切衆生の大施主なりと化儀喩品に曰く如來も亦た復た是の如し今此等の為めに大導師と作ると又曰く者は諸法の主なりと斯樣なる言葉は到る所に書かれてある

二　說法界

說法界は將來增加する所の佛如來の境界である

說法は一切衆生病度の唯一の大方便である

方便品に曰く舍利弗よ現在十方の無量百千萬億の佛土の中の諸佛世尊の衆生を饒益し安樂せしむる所なる是の諸佛も亦た無量無數の方便種々の因緣譬喻言辭を以て而して衆生の為めに諸法を演說す是の法も皆一佛乘の為めの故なり是の諸の衆生の佛に從つて法を聞くことの究竟して皆一切種智を得かと又曰く舍利弗よ來來の諸佛の當に世に出つべきも亦た無量無數の方便種々の因緣譬喻言辭を以て而して衆生の為めに諸法を演說せん是の法も皆一佛乘の為めの故なり是の諸の衆生の佛に從つて法を聞くことの究竟して皆一切種智を得べしと

三　佛國界

佛國界は一切衆生佛如來となるべき所の境界である

之は御教最終の大目的大理想の所詮となるべく其有様は浄土三部経に書いてある西方極楽浄土を極度まで進歩せしめて之を十方無限に擴大し永久の未来に持續せしめたりとしてある。

此三部経は浄土宗が之をば他力宗の様に説いて居るところのは下根の者を相手にしたからである即ち弥陀の未は法藏菩薩の時に四十八の大誓願を建て一切衆生を西方浄土に導かんと決心なされたのであるから此弥陀如来にさへ帰依すれば往生疑なしと説いたのである。

偖し上根の者に於ては自ら第二第三の弥陀如来となって自任し我から一切衆生を救度せんとするのである。

根有の帰依渇仰の必要なれば矢張り法藏菩薩の時に新極楽の和解を掲げて四十八の誓願を立つればよいのである。

加之ある其下根の者と雖も浄土宗は知らず三部経本来の主旨は厳まれも自力なりとしてある。如何となれば其所謂弥陀の浄土なるものを十萬億土の西方に置くのである。根の上下に拘はらず一切衆生誰でも各自自覚明了に之を想念して的確に之を自己心中に實在せしめるに在るとしてある。

第十二章　施主界

施主界は一切衆生の大施主たる従者の仏如来の境界である。
施主の地位も三方面より看察することの出来る。
事物上より云へば一切衆生は皆我が子である。空間上より云へば大宇宙は我が居宅である。時間上より云へば永久の歴史は我の傳記である。

斯のごとくして施主界は一切衆生の父子と大宇宙の居宅と永久の傳記との三種に分れる。

一　一切衆生の父子

一切衆生は我が子なりと仏は事物上に於ける施主の地位である。
譬喩品に曰く我は衆生の父なりと又曰く世間の父なり一切衆生の父なり一切衆生は皆吾子なり其中の者は悉く是れ我が子なり

と。

信解品に於て大弟子等曰く大富長者は即ち是れ如来なり我等は仏子に似たり如来は常に我等に子なりと説く我等は昔より来かた真に是れ仏子なり仏に似たり生ず。

譬喩品に於ても今は即ち知る真に是れ仏子なり

授学無学人記品の羅睺羅の授記のほかにも曰く嘗て十世界微塵数の諸仏如来を供養すべし常に諸仏の為めに而も長子と作ること猶ほ今の如くなるが是の諸七宝華仏の国土の菩薩衆会の劫数所化の弟子正法像法も亦た此の如く異なるなし亦た此仏の為めに而も長子と作らん。と踏七宝華如来は羅睺羅である山海慧自在通王如来は我の親である故に仏如来と衆生との関係は常に師弟の関係ばかりなく実際に親子と羅睺羅との間に於けると同

様に親子の関係である。

二　大宇宙の居宅

大宇宙は我居宅なりとは空間上に於ける施主の地位である

壁喩品に曰く国邑聚落に大長者あり其年衰邁にして財富無量なり

多く田宅及び諸の僮僕あり其家廣大にして諸の人衆多く一百二百

乃至五百人其門に止り住す時に欲然として火起る而して諸子等火

宅の門に於て焼燃に驚怖して出ずるを而も長者の意なきが如し諸の

衰生を見るに生死苦患憂悲苦惱の焼く所となり解脱を求めず此三

界の火宅に於て東西に馳走し大苦に遭ふと雖ども以て患と為さず今

此三界は皆是れ我有なりと聖天経にも亦曰く須弥と大海も悉く

永久の歴史は我が傳記なりとは時間上に於ける施主の地位を云

ふのである。

壽量品に非常に永い年数を設いて曰く我れ実に成仏してより已

来久遠なること斯の如し但方便を以て衆生を教化して仏道に入ら

しめ是の如きの設を作す諸の善男子よ如来の演ずる所の経典は皆

衆生を度脱せんが為なり或は己身を説き他身を説き或は己

身を示し或は他身を示し或は己事を示し或は他事を示す諸の言説

す所は皆虚妄にして実のみなす立て所作の仏事未だ曾て暫くも捨

てず是の如く我が仏身の如りて未だ滅度に入らず今亦復然り無量

所傳相却なり常住にして滅せず諸の善男子よ我もまた菩薩の道を行

して成ずる所の寿命今猶未だ盡きず復た上数に倍せるなり

第十三章　說法界

說法界は其方便功德により將來益々增加すべき佛如來の境界なる。

說法の大方便大功德なれば三方便より有來することが出來る事物上より云へば法の供養である空間上より云へば應宜流布である時間上より云へば繼續擁護である。

斯の如くして說法界は法の供養と應宜流布と繼續擁護との三種に分れる。

一　法の供養

法の供養は事物上に於ける說法の方便功德である。

說法の法は種々無限にあるが要するに一切種智の講義である故に藥草喩品に曰く如來の說法は一相一味なり究竟して一切種智に至る。又曰く彼の大雲の雨の潤す其澤普く卉木叢林及び諸の藥草の根莖枝葉中根中莖中枝中葉大根大莖大枝大葉に沿し諸樹の大小上中下に隨うて各受くる所なり一雲の雨なれども所其種性に稱うて而も得て生長することを得と。

又應病與藥なるが故に說法する事極は無限に亦來る義門品に曰く應に佛身を以て得度すべき者には即ち佛身を現じて而も爲に法を說き應に辟支佛身を以て得度すべき者には即ち辟支佛身を現じて而も爲に法を說き應に聲聞の身を以て得度すべき者には即ち聲聞の身を現じて而も爲に法を說き之を乃至三十の現身法の示されてあるが此等は單に其一例に過ぎない。

二　應宜流布

應宜流布は空間上に於ける說法の方便功德である。

法華経に曰く世尊滅度の後に一心に此法を流布し廣く増益せしめんと又曰く世尊滅度の後に受持読誦し廣く此経を宣し一切衆生をして普く聞知することを得せしめんと聞き隋光こゝに於て法會より出て餘の所に至り其聞し所の如く遍く説いて是の人等一聞之を隋光し復た行いて轉教せしむ是の如く展轉して五十に至るまで其の五十の隋光の功德は四百萬億阿僧祇の世界の六道四生の衆生の一人一人に同体菩提に充満せり總て優婆夷無へ供給することハ十年間所〻に盛後に總ての衆生をして阿羅漢道を得せしめた功德に比すれば其百千萬億に上ること況や第五十の隋光者ん至っては其功德の偏大なること到底比較すべきものはなしと

三　維持擁護

維持擁護は時間上に於ける説法の方便功德である之は法の囑累である維持し之を擁護して滅失せざる様にすること無かるべしと之を維持し之を擁護して滅失せざる様にすることである

法華経の囑累品に曰く我滅後の無量の菩薩摩訶薩の類を廣説して我が無量百千萬億阿僧祇劫に於て是の得難き阿耨多羅三藐三菩提の法を修習せん今以て此経に付属す維摩経の囑累品に曰く彌勒よ我れ今此に付属す是の如きの経を佛滅後末世の中に於て流通せしめ等仲力を以て廣宣流布し閻浮提に於て断絶せしむる無かるべしと法華経の勸発品に普賢菩薩曰く世尊よ我れ今神通力を以ての故に此経を守護し如来の滅後に閻浮提の内に廣く流布せしめ断絶せざらしむべしと

第十四章　佛國界

佛國界は一切衆生悉く佛如來となり世を挙げて佛教の大理想たる完全無欠圓滿なるものとなつた境界である

佛國界の有様も三方面より看察することの出来る

事物上より之へは一切成佛である空間上より之へは十方淨土と

ある時間上より之へは永久莊嚴である

斯の如くして佛國界は一切成佛と十方淨土と永久莊嚴との三種

に分れる

一　一切成佛

一切成佛は佛國の事物上の有様である

之は一切衆生は皆悉く佛如來となつて人間は下は勿論のこと諸

天声聞緣覺菩薩等まで皆なくなつて仕舞つたのである 秋四曰く我

れ本と誓願を立て一切の衆生をして我等か如くして異なる

のなしめんと欲す之を是の諸の衆生の併に從つて法を聞くりの究

竟して皆一切種智を得たり之を声聞若くは菩薩に說く所の法の乃

至一偈を聞かは皆佛となること疑なしと

二　十方淨土

十方淨土は佛國の空間上の有様である

東西南北四維上下遠近殊らず悉く淨土となり無限の宇宙到る所

淨土ならざるはなしと云ふのである

阿彌陀經に曰く極樂國土に七寶の池あり八功德の水其中に充滿

す池の底は純ら金砂を以て地に布き四邊の階道は金銀瑠璃玻瓈

以て合成す上に樓閣あり亦た金銀瑠璃玻瓈硨磲赤珠瑪瑙を以て而

して之を嚴飾す池中の蓮華大なること車輪の如く青色青光黃色黃

光赤色赤光白色白光微妙にして高潔なること無量寿経に曰く其
佛の国土は自然にして寶の金銀瑠璃珊瑚琥珀硨磲碼碯を合成して地
と為し恢廓曠蕩にして限極すべからず光耀焜煌微妙殊絶清淨莊厳
なること十方の一切の世界に於て踰すること其他樹木浴池食物に於
等に至るまで想像し得る限りの精妙なる文字を羅列してある
法華経に書かれたものは曰く其土平正にして頗黎を地と為し寶樹
莊厳し黄金を繩と為して道の側を界ひし妙華地を覆ひ周遍清淨
にして見る者歡喜せしむ
此等を極度まで進歩せしめて十方無限に擴大せしめたるのが
ち十方淨土である
三　永久莊厳
永久莊厳は佛国の時間上の有様である
未来永久に絶えず引き続く所の莊厳である
阿彌陀経に曰く彼の佛国土は常に天楽を作し黄金を地と為し晝
夜六時に雨ふる曼陀羅華を雨らす種々奇妙雜色の鳥あり白鵠孔雀
命の鳥なり是の諸の鳥は晝夜六時に和雅の音を出す其音は演暢な
り微妙吹りて諸の寶の行樹を動かし寶の羅網は微妙の音を出す譬
は百千種の樂の同時に俱に作るが如し是の音を聞かば皆自然に念
佛念法念僧の心を生ずと又無量寿経に曰く彼の国の時の春秋冬
夏なく寒からず熱からず常和調適なりと其他音声や香風などにも
いても矢張り想像の限りの書かれてある

第十章　儒教論

儒教は我々は本末の聖人を模範として聖人にならねばならぬと云ふのである

其模範とすべき聖人と云ふのは人間に具はりて居る天賦自然の道を盡した人である又其道と云ふのは大學に曰く物に本末あり事に終始あり先後する所を知れば即ち道に近しと故に聖人の道を大別すれば事物の道と本末の道と終始の道とに分れる之は總て仁智勇の三大德となるのである先後する所と云ふのは更に此等の諸々の順序細目のことである

事物の道は事物殊に人間に関しての道である本末の道は空間に関する道である終始の道は時間に関する道である

斯の如くして儒教は事物と本末と終始との三大綱に分れ而かも此三大綱の要旨は論語の開卷第一章に掲げられてある

一　事物經

事物は事物に関する聖人の道である

論語に曰く人知らずして而も君子ならずやと人知らずとは人の居かなることを慍らずとは腹を立てぬことである

其所に居所なき者には親切をすれば其効がある併し居所なき者になると如何に親切をして其効がない之が為め道に腹の立つ様なことがある其所を慍を立てず厚くしても親切を盡すのが君子であると云ふのである

即ち我々は君子として人の賢愚を分たず總て之を愛して親切を盡すのが事物上の聖人の道である

二　本末經

本末は空間に関する聖人の道である

論語に曰く朋有り遠方より来る亦た楽しからずや朋とは味方のことである朱熹の註に遠方より来れば即ち近き者は知るべしとある

其所て近い所の者は皆既に味方となって居る所へ遠方の者迄も味方となって来たのて今や天下に款なくよく流れ明かに知れ渡るのが楽しいとゝいふのである

即ち孔子の明知の德が天下到る所に廣く行き渡るのが本末上の聖人の道である

三　終始経

終始は時間に関する聖人の道である

論語に曰く学て而して時に之を習ふ亦た説ばしからずや学ぶとは孔子の道を稽古し行ふこと時にとは漸次にといふこと之を習ふとは其が習慣になって自つから出来るといふことである

其所て孔子が始めは勉めて行なはれたことも後には難なく出来る迄の生涯中に行はれたことも習慣となって後世に傳はるのが説ばしいといふのである

即ち孔子の德行が後世に至るまて永く傳はり行くのが終始上の聖人の道である

第十六章　事物經

事物は總ての人を愛する所の聖人の道である。

之には親疎の順序がある孝經に曰く先王は德の本なり教の由て生ずる所なりと論語に有て曰く君子は本を務む本立つて而して道は生ず孝弟なる者は其れ仁を爲すの本なるかと子曰く弟子入つては則ち孝に出ては則ち悌に泛く衆を愛して而して仁に親む故に孝行は本である種である其が發芽して德となり其が生長して君子の仁となるのである

孝行は親に事ふるの道である德は緣故の人々に事ふるの道である君子は衆人に事ふるの道である

親に事へて孝行ならざる者が緣故の人々に對して德なる能はず緣故の人々に對して德なるさる者が衆人に對して仁なる能はざるは勿論である

斯の如くして事物經は孝行と德と君子との三大目に分れる。

一　孝行篇

孝行は親を愛するの道である

親とは父母である祖父母は親の親の祖父母其又親の曾祖父母其から既に遡る所の先祖は總て此の中に含まれる詩の大雅に曰く

帝の祖を念ふこと亡からむ厥の德を事へ脩むと

親のない人はない親の恩は云ふまでもない又親は何れほど多を思ふものであるかと云ふに唯我のみの惟ひ惟ひ慈しみ心配して自分はたとへ何らなりとも多の苦一つ彼の望むのみならず保つて寢ても唯一心に彼かの安かれかし良くなれかしと祈るのみはない。のである又此親子の關係は切つても切

れぬ至深至密のものと考かれ親は我の本である親が有るこの我で、
親が無ければ我は無いのである
故に親の母の我である我の母の親とはなり自分は自分のもの、
様で自分のものとなり親のらの大切な慣りのものである故に他人
の様で他人でなく、斯る親の大恩は天よりも高く地よりも厚いのである
尤様な親に対する孝行の道である又たる者には自然に具はる
所の人情で心に添ひ行ひに顕はれ出て少しも戻る所なく苦
の道である之が本来である敢て他より教え送りて智恵を付けねば
出来ぬ様な厚顔なものとはなりないのである
然れども種々の間違からして我々は本来の軌道を脱られて親不
孝に陥るのである故に其所で我々は聖人を見倣ひ本来の孝道を失
はぬ様にするの必要がある
二　恢徳悉
恢徳は縁故の人々を愛するの道である
大学に曰く恢は長に事ある所になりと長とは叔父母兄姉夫師匠
其他目上の人達である偖て廣い意味では朱錫圭氏人其他朋友近
隣等縁故のある人々を総称するのが稱言である
我々は絶海の孤嶋に単獨生活を送るでないに上縁故の人々の
ないことはない此等の人々は親子を遠い他人であるけれども其れ
は他人々々に見るときのことで全体と一緒のにして見るときは親
も他人ではないのである之ものは我々は此等の人々の陰分種
々の必要な世話を受けて来たのみならず密今後厚く世話にな
らねばならぬのである場合によっては彼の親にも帰する世話にな

ることも珍らしくない。

故に此等の人々がかつて云へる今日の我も今後の我も立ち行くと云ふ様な事でもあり此等の人々のみの中の人々でないのである。其所を考へると此間の関係は矢張り親子の関係と違つたことは無いのである。此に此財徳は親に対する孝行の補充されたりの点迄さらに遠くへ及ぼしなる文のみのみで本来の性質を云へば等しく大恩に感謝する所の自然の人情から出て来る行に顕はれ出つる所のものである。

其所で古此等の人々を個人々々に見ても其れは唯全体の部分と云ふことになる丈のこと親に於ても父あり母あり祖父あり祖母あり又其身体に耳目手足等の部分のあると同様である。

三　君子篇

君子は衆人を愛する道である。

衆人に知るも知らぬも一切の人を綜て含むので此等は更に縁が遠くなるのである。

例へば全体の一切の衆人全体を一纏めにすれば矢張り縁が遠いなどと云はれないのみならず他人とさへ云はれなくなるのである。

我々日常の衣食住を始め何から何まで世間の衆人の御蔭によつて出来て居ないものはないのである故に此世の中は總て人人が互に助け合つて行かねばならぬ世の中で自分獨り生きて居られる世の中ではない故に又衆人の幸福なれば我も幸福に衆人の災厄を蒙むれば我も亦災厄を免れないのである。

其ようすると我の内の衆人ではなく無論衆人の内の我である其衆人に対へる所の君子の仁は矢張り孝行財徳を一層厚く補充したも

のに過ぎないのである是れ亦た等しく大恩に感謝する自然の人情より心に深き行に顕はれ出つる所のものである

之を又箇人々々にしても矢張り全体の部分たるのみならず之は此様如何なる人々に何時何所で如何なる世話にならぬものでも無いのである

此言葉の仁は廣く之人は敢て人間にばかり限つたのでなく他の動物にも植物にも乃至無生物と雖も親切に之を親切にすべきである唯人間なるものは世の最も大切なる至寶で尊ぶ此等動植無生の一切を代表するものであるから之を言葉で論ずれば他は自ら之に含まれて居るのである

第十七章　孝行篇

孝行は親を愛する所の孝行の道である

論に曰く小孝は力を用ゐ中孝は勞を用ゐ大孝は愛しかしこのすと又曰く大孝は親を尊ぶ其次は愛かしめす其下は能く養ふと故に孝行に大中小の三段の程度がある

小孝の力を用ゐ能く養ふとは自身を以て親の身に事へるとある中孝の勞を用ゐ厚かしめすとは自心を以て親の心に事へるとある大孝の愛しかしめすとは親を尊ぶとは孝意を以て親の意に事へるのである

大學に曰く意誠にして而して後に身修まる此意と云ふのは心の上に在つて心身を主る所の大本で真の人である真の我である

此等の中孝中孝大孝の区別は孝行の程度の高低である。されども甚程度の低きものは猶更必要な条件であるから何れも同時に無ければならぬ要件である。

斯のべくして孝行は小孝と中孝と大孝との三条件に分れる。

一　小孝

小孝は我身を以て親の身に事へることである。人には身体があつて種々の要求をする甚要求の後で最も必須なるものは衣食住である。孟子に曰く曾元は曾子を養わんに必ず酒肉有り将に徹せんとする也問も無き所を請はず餘有りやと問へば曰へり曾元の如き可謂能く養ふ者なりと曾子は曾元の親なる徹せんとするとは食事が済んで膳を下げることを請はずとは餘りを誰に無上一さかしと問へこと此等は小孝にして中孝の欠けて居るものである。

論語に曰く子游は孝を問へば曰く今の孝は是れ能く養ふを謂へども犬馬に至るまで皆能く養ふ有りし故に衣食住の養は孝行の最低限度で犬馬に至るまでも皆能く為す所である。から人間としては我身を割いても親には充分のことを尽さねばならぬ立を欠く様なことがあつては畜生にも劣る親不孝と謂はねばならぬ。

二　中孝

中孝は我心を以て親の心に事へることである。身体の上に心があつて是れ精神上の要求をすることは人として無くてはならぬ所である。其要則の標題は人により時により一概には云はれぬ。

孟子に曰く曾子は曾哲を養ふに必ず酒肉有る時に徹せんとす
必ず與ふる所を請ふ餘り有りやと曰へば必ず有りと曰へり曾子の養
さは即ち君を養ふと謂ふべしと云へり天に未だ大孝とは称かねのこと
りと可なりとは先づ曾子いとこの天に未だ大孝とは称かねのこと
る

唯精神上の要求中親として子を思ふ心の如なるは進人と雖も總て
て同じ様なる故に論語に曰く父母在す時は遠く遊ばず遊ぶ
必ず方ありと之は子の親を第一として遠くへ行かぬのみならず親の子を
心配するから遠くへ行かぬのみならず遊ぶ必ず方ありとは必要なる
て行かねばならぬ時は其行く所を父母に告げ其許を受け且つ其外
へ通り路をしてはならぬと云ふこと之によれば孝行は日々の為の
の孝行である親の心は実に斯したかり離いりのことである

三 大孝

大孝は我意を以て親の意に事へまつることである
心の上に意思も真の人かうして之が道徳上の要求とすることは
萬物の霊たる人間に於て特に必要のことである精神上の要求は快
苦好惡に関係し道徳上の要求は善悪邪正に関係す
論語に子曰く今の孝は是れ能く養ふを謂ふも犬馬に至るまで皆
能く養ふあり敬せずんば何を以て別たんやと孟子曰く大孝は終身
父母を慕ふ五十にして而して慕ふ者は予れ大舜に於て之を見るか
孔子曰く舜は其れ至孝なり五十にして而して慕ふと謂ふべしと
とは同じことである

赤子は明けても親慕ふも親飢ても親飽ても親て天にも地にも親
の外に頼みなく此赤子の自然の情は教慕ふである孟子曰く大人と

は其赤子の心を失はさる者なりとまた子者は赤子の時の慈母の情を終身其懷に抱き續け決して失つてはならぬことである

けれども子は親のもとに殘るものである其らなつては親は既に此世に亡き人となる筈の所で其れは始うなるとまた孝行の仕度い時分に親はなしとかいふ言葉がある嗚呼至高至深の義の大恩は如何なることをしても到底報し得られないものである我々は厚く

この孝道のみちを終らねばならぬ

第十八章　悌德篇

悌德は緣故の人々を愛する所の悌德の道である

此悌德は孝行の德の擴充とするから孝行に小孝中孝大孝の三条があるが如く悌德にも小悌中悌大悌の三条がある

小悌は我身をもつて緣故の人々の身に事へるのである中悌は我心をもつて緣故の人々の心に事へるのである大悌は我意をもつて緣故の人々の意に事へるのである

斯のごとく悌德は小悌と中悌と大悌との三条に分れる

一　小悌

小悌は我身をもつて緣故の人々の身に事へるのである

論語にいはく子曰く夫子は溫良恭儉讓と朱熹の註に讓は謙遜なりとある衣食住の二つには人に先ち良い物を進めることに骨

を折らねばならぬ言ふまでもなく人と分量の多少品質の良否と分ふかの如きは不悌の甚しきものである

二　中悌

中悌は我心を以て縁故の人々の心に事へるのである

孔子曰く老者は之を安んし朋友は之を信しかつ者は之を懐くと之は悌縁の一例である安んずるも信ずるも懐くるも其主意は精神上の要求を満足せしむると云ふ上に於て全然同一である人は年齢によりて精神上の要求に多少の相違が生ずる

少者は春秋に富み将来世上に雄飛せむことを希望するが故最も恩師の教導を喜ぶものである朋友は社会には壮年の人で盛に事業を為す時代であるから相互の信義を喜ぶのである老者は既に餘命が短かくなるに付け所人子孫等の生先を心配するものである

三　大悌

大悌は我意を以て縁故の人々の意に事へるのである

諸章は孟子に問ふて曰く象は日々に舜を殺すを以て事と為す象は言つて不仁なり之を有庳に封ず仁人は固と是の如きかと孟子曰く仁人の弟に於ける也怒を蓄めず之を親愛するのみと象は舜の弟で心が甚くなかつたが舜の徳に感化されて善くなつた人である有庳に封ずるは良き待遇怒を蓄めずは陸を立てた形のないことと怨を蓄めずは怨む心のないことである

孟子の云ふ所は大舜には弟の象を親愛するこふ情より外に他なき迄つた考も何も迄つた行ひも生て来ないと云ふことである此のめく最其人に対する所の親愛なるものは兄弟の間に於ける天然の至情である

第十九章　君子篇

君子は衆人を愛する所の仁德の道である

此仁德は孝行悌德の発展である から孝行悌德に大中小の三条件のある通り仁德にも小仁中仁大仁の三条件がある

小仁は己れ身をはって衆人の身に事へるのである 中仁は己れをはって衆人の心に事へるのである 大仁は己れを捨て衆人の意に事へるのである

斯のごとくして君子は小仁と中仁と大仁との三条件に分れる

一　小仁

小仁は己れ身をはって衆人の身に事へるのである

孔子曰く 犬れ仁者は己れ立たんと欲して而して人を立て己れ達せんと欲して而して人を達す 故に君子は衣食住のことには自分よりも衆人を先にせねばならぬ

犬治が可愛の衣食住を足すものが為め天下の珍味を治さに富り自己の衣食住には豆のなりつたのである 曰く一たび梳ずるに嘗り三たび髪を握り一たび食するに嘗り三たび其味を吐さ三たび其門を過ぎて のらずと髪を結ばむとして三度も中止するほど自己の衣に豆かなく食事中三度も箸を捨くりと自己の食に豆かなく三度も家の前を通りて休息すること出来ないのは自己の住に豆かないのである

二　中仁

中仁は己れをはって衆人の心に事へるのである

衆人の精神上の要求に一致する通りてはなりの道は近さに存りとこのことがあらわしいのである

孔子曰く己れの欲せざる所を

人に施す勿れと

孟子曰く王はかし仁政を民に施し刑罰を薄くし深く耕し易耨らし壮者は暇日を以て其孝悌忠信を修めて入っては以て其父兄に事へ出ては以て其長上に事へしむ之を之謂ふ民の樂を樂む者は民も亦其樂を樂む民の憂を憂ふる者は民も亦其憂を憂ふ樂むに天下を以てし憂ふるに天下を以てす然り而して王たらざる者は未だ之れ有らざるなりと

要するに民衆の心を以て我心と為すのである

三　大仁

大仁は我意を以て老人の意に事へるのである

詩に曰く豈弟は民の父母なりと此大仁は民衆の父母となって之を慈しむ所の至情である

孟子曰く商は天下に遡ること者あらはこれ之を澤くすが由く暴ふなりと一切民衆の休戚を己れ一人の責に帰するのである孟子曰く大禹は人と善を同じうすと自分はかり善人でなく一切の民衆をも善人にしたいとこころのである故に禹曰く落方に罪あらば罪は朕が躬に在り百姓に過ち有らば予一人に在りと我まだ民衆の悪いのとはなく之を育つる自己の悪いのであると云ふ父母の至情である

第二十章　本末經

本末は廣く天下を知る所の聖人の道である

之には本と末との順序がある大學に曰く意識にして而して位に心正し心正しくして而して位に身修まり身修まって而して位に家齊え家齊ひて而して位に國治まり國治まって而して位に天下安かなり其本亂れて而して末治まるものは否さるなりと此誠意正心修身齊家治國天下の古殿を更に三殿に納めることが出来る

誠意正心修身は自己を知るの道で根の源である齊家治國は他人を知る道で根の流れである天下は天を知る道で大海の水である

天とは一切全体を云ふのである故に為す所一身の上に於ては修むるのみならず能く其影響する所は所謂庶民の道理で国家天下より大は廣く宇宙の果まで其影響を及ぼして誤らない所である

而して自己を知らざる者は他人を知る能はず他人を知らざる者は天を知ることは能はざるは勿論である

斯の如くして本末終は誠意正心修身と齊家治國と平天下との三大目に分れる

一　誠意章

誠意正心修身は自己を知るの道である

我意我心我身も自己なるものは近く之を父母より受けたるものであるが遠くは之を天より賦與せられたものである

此天賦の自己の本来の自然其儘のものであったならば自己と自分の明暗に到りサーも到らぬと云ふ様な憂はない之を知る之の儘正直の儘直質の儘なるとい云ふのである

然るに物の蔽い所となり自分の目を塞ぎ色眼鏡を掛け悪いことも善いと想ひ込むと云う様な自分で自分が判らない所の虚偽不正直暗愚の病に罹るのである。是れ亦た聖人を見倣うて吾人本来の正直の德を失はる様にせねばならぬのである。

二　齊家篇

齊家治國は他人を知る道である

我々は妻子眷族と共に一家を様へ同朋相集まりて一國を為すことも是れ亦た天然自然の約束である

斯る一家一國を経營するには各人各部互に耳目となり互に手足となり相助け合つて一箇の有機的團体を組織するのであるから一國は一家の擴大せるものに一家は一身の自己の擴大せるものにて此等の人々は其間互によく疏通し分け隔てなく互によく判りて緩急相應ずる様でなければならぬ之が即ち賢良の德と云うのである

然るに是れ亦た自己の私慾に迷ひ他人の上は見かせず聞かせず見ず聞らず聞いても判らずと云う不賢吝嗇邪曲の病に陷るのである

三　天下篇

「天下は天を知るの道である

天とは一切全体の元で是れ亦た至大の有機的團体にして一家一國を極度に擴大したるものである。而して此天をよく知ることの出来るのは智德とそなわるのである。

支那では天下を治むるのは天であるとなして居る而して天命を享け天に代つて之を治むるものを天子とみのべ智德のすぐれたる人でなければ天命を享ることの出来ない故に孟子曰く正大の絃を誅

さまを聞くと其位に居つても天子ではない之智德のあつても天命を受けなければ天子となることが出来ない伊尹周公孔子は天子になられなかつた故に孟子曰く天なりと

仮し天子でなくとも智德を備へて天下の政に関與收力することは孔子の為すべき事業である或人問て曰く子何ぞ政を為さざるや曰く書に云ふ孝なるかな惟れ孝なり兄弟に友なれば政有りて施すこれも是れ亦た政を為すなり奚ぞ為すを為さむや中と孟子曰く孔子春秋を作る春秋は天子の事なりと

然らば天子でなければ行ふ道ふのことを云ふに其れは孟子のこつた直り天は天下を主宰すると敬せさるとに在るこれ手詰せずと教せは如何聖人に奈し億兆の君師となるこの君師を以て其

而して所を知らしむるのである

第二十一章　誠意巻

誠意正心脩身は自己を知る所の正直の道である

孔子曰く生れながらにして所を知る者は上なり学んで所を知る者は次なり困しみて所を学ぶは又其次なりと中庸に曰く或は生れながらにして所を知り或は学んで所を知り或は困しみて所を知ると之に正直の德に上中下の大中小の三条件の有る所以である

困しみて所を知るとは云ふのは我身を以て自己の身を知る所の小直である学んで所を知るとは云ふのは我心を以て自己の心を知る所の中直である生れながらにして所を知るとは云ふのは我意を以て自己の意を知る所の大直である

斯のごとくして誠意正心脩身は小直と中直と大直との三条件に分

れる。

一　小直

小直は我身を以て自己の身を知る所の道である

之は備身と云ふのに當る。のみ衣食住の要求に関係して居る

論語に子曰く富と貴とは人の欲する所なり、貧と賤とは人の惡む所なり、死生命あり富貴天に在りと。故に我身の生死貧富貴賤は天命である天職である天壽である自分等に於て自由にすべきものではない、斯の如く清淨潔白に我身を持つのは正直の本来の素質である

知るを其れ天命に委せず自ら進んで生死を求め自ら進んで富貴貧賤を求む、孤なことは何うしても無理とせねばならぬ。生を求め富貴を求むるは自然である死を求め貧賤を求むるは自然である何れも我身を知るの明なきゆえに天壽は失なはれて人壽に陥る。天職

正直の素質は既に偽はれて我身と我身の清い関係とを失はなければならぬ。

二　中直

中直は我心を以て自己の心を知る所の道である

之は正心と云ふのに當る。精神上の要求に関係し自己の人格を知るのである

心も亦た天職天壽にして身体よりも更に大切なものである其天職の心は本来水精の透明なるが如く又明鏡の光の曇りなく凸凹なきが如きものである故に總て有りの儘に透って見え總て有りの儘に心に映り有りの儘に心より照り輝やく（さるのである孔子曰く詩三百一言以て之を蔽ふべし思ひ邪無しと大學に曰く惡臭を惡むが如し好色を好むが如しと

然るに之も亦た心外の物の殺し所となりて白いものが黒く見え見えるものも見えなくなる様なことになる故に聖人は立て戒められたるものに曰く非禮視る勿れ非禮聽く勿れ非禮言ふ勿れ非禮動く勿れと

三　大直

大直は我意を以て自己の意を知る所の意なり

之は誠意と云ふに密り道德上の要部に関係し自己の人物を知るものである

此意と云ふは其の自己と一切の責任の根本我身よりも我心より重く最も大切なるものである故に曰く仁を為すは己に由る而して人に由らんやと大學に曰く所謂其意を誠にするとは自ら欺く毋きなりと故に曰く人の生や直なりと孟子曰く人性の善なる猶ほ水の下に就くが如きなり人不善あるなし水下らざるなしと又曰く競弈も人と同じきのみと斯の如く自己本来の人物は純善にして大直である

故に曰く己を修むるに敬を以てす此敬も親を敬愛するの敬で自己本来の純善に基する慎慮の情である孟子曰く我固く結怨他の氣を養ふと

第二十二章　齊家篇

齊家治国は他人を知る所の賢良の道である

此賢良の德は正直の德を擴充してあるから正直に小直中直大直の三条件がある

小賢は我身をはて他人の身を知るのである中賢は我心をはて他人の心を知るのである大賢は我意をはて他人の意を知るのである

斯のごとくして齊家治国は小賢と中賢と大賢との三条件に分れる

一　小賢

小賢は我身をはて他人の身を知るのである

之は他人の衣食住の関係である子童は孔子に向て曰く食ひて謾みなく居て驕らなさ何如と孔子曰く可なり未だ貧にして樂み富て禮を好む者に若かざるなりと貧にして樂むとは倹約のことである

倹約は禮の本を問ふる曰く大なる哉問や禮は其の奢らむよりは寧ろ倹なれと故に貧を樂むも倹約富て禮を好むも倹約と何れも自己の用を節約して公共の用に充つるのである

之に五一貧にして謾へ富て驕らざるは自己の用のみを足して公共の用を減殺するのと行れも吝嗇である元来貧富の別は一方に富貴あるあるから他方に貧賤の止むを得さるものがあるのである之れ富貴を貧らむとするのは敢て直さす他人をして貧賤ならしめさるを所にて他人の身を知ることに出来ぬ不賢者と云はねばならぬ

孔子曰く賢なる哉回や一簞の食一瓢の飲陋巷に在り人其憂に堪えす回や其樂を改めす賢なる哉回や

二　中賢

中賢は我心をはて他人の心を知るのである

之は他人の精神上の要求を明かにすることである。廣辭に曰く赤子を保つが如く心誠に之をおもんぱかる中くすと雖も遠からず未だ嬰を産むを学ぶ者は有らざるなりと自分の心が正しければ他人の心は自然に到るものであると云ふこと

然るに黄公は孔子に訪つて曰く吾愛卿と直くするものあり其父羊を攘みて而して子之を訴す孔子曰く吾党の直は是れに異なり父は子の為めに隱し子は父の為めに隱す直其中に在りと黄公の為は偽に馬康正直と云ふ如て人の心が更に知らない者と目かちろ口かちるけれども心のないと同様に正直でも賢良でもないのである

孔子の賢良は獨り親子間のみならず總て他人の心を察して人の材を知る者としたことけれども之ちは到底人である。

三　大賢

大賢は我意を以て他人の意を知るのである

之は他人の喜悪に関係する即ち他人の人物の如何を明かに知るのである

樊遲は孔子に知を問ふて曰く人を知ると樊遲未だ達せず曰く直きを挙げ諸の枉れるを錯かば能く枉れる者をして直からしむと樊遲退き子夏を見て曰く郷きに吾れ夫子に見えて而して知を問ふて曰く直を挙げて諸の枉けるを錯かば能く枉れる者をして直からしむと何の謂ぞや子夏曰く富めるかな言や舜は天下を有ち衆に選び伊尹を挙げて不仁者遠かりぬ湯は天下を有ち衆に選び伊尹を挙げて不仁者遠かりぬと

意有の方のみは賢愚の見分けがなかなかけんらも賢有の方から

は能く賢愚の見分けはなくつてある訳に至つて己れを低くするはく
と低くする道理が愈々明瞭となりたる次第である

第二十三章　天下篇

平天下は天を知る所の智德の道である
此智德も正直賢愚に小中大の三等あるから
ある直く智德にも小智中智大智の三等位のある
小智は我身を以て天の身を知るのである中智は我心を以て天の
心を知るのである大智は我意を以て天の意を知るのである
斯の如くして平天下は小智と中智と大智との三等位に分れる

一　小智

小智は我身を以て天の身を知るのである
之は天下の衣食住の問題である
論語に有若曰く百姓にして足らば君誰れと與にか足らざる百
姓にして足らずんば君誰と與にか足らざると孟子曰く農時を奪へ

んは穀倉に時に可からざるなり数罟を洿池に入らしむんは魚鼈食に勝へ可からざるなり斧斤は時を以て山林に入る材木は用に勝へ可からざるなり之を之を益なはしめ漁の恵を見る王正に立て鴻雁麋鹿を顧る曰く賢者にして而して後之を楽むなり賢者にして而して後之を楽むなり賢者は此有りと雖も楽まざるなり士の人は民と偕に楽む故に能く楽むなり

天下の豊凶の因て来る所は明かなるなり

二　中智

中智は我心を以て天の心を知るのなり

立ては天の精神上の要なるは古語に曰く天言はず民を以て言はしむと故に天の心を知るには民君の言を聴かざるはなし然るに民の口を塞ぐ可からざるを以て喉を以て得なりとす有かるを塞ぐ喉

すれば民を以て聾ならしむる能はざるのみならず民の口を塞くの害は己の身を救ふに如かざるのみに止まらざるなり

帝堯は天下を治むること五十年天下治まるの徳化已れを載くを願はざるを知らず左右に問ふ已れを載くを願はざるを知らず外朝に問ふ知らず野に問ふ知らず乃ち微服して康衢に遊ぶ童謡を聞く曰く我の蒸民を立つ帝の極に逝さ之に英し識らず知らず帝の則に順へり老人有り哺を含み腹を鼓し壤を擊て而して歌て曰く日出て而て作し日入りて而て息む井を鑿りて而て飲み田を耕して而て食ふ帝力何ぞ我に有らんや帝堯の知らずとは知らざるに非ず其上にも知らざることを欲するなり左右の知らずと云ふのも知らざるに非ず帝堯の心を知らんと之に善力る所を知らざるのみなる童謡の知らずと云ふのも此上帝堯に

知りて奉仕する所を知らざるものとなる

三　大智

大智は我意を以て天の意を知るものである

之は天の道徳上の要求である天下を治むる者は天子に非ず聖人に非ずして天である如何に大力の大聖人でも天意に拘はりずして天下を治むることは出来ぬ之は儒教の説く論たる所である

孟子曰く夫れ天未だ天下を治せんと欲せざるなり如し天下を治せんとすれば今の世に當りて我を舍て其れ誰ぞやと又曰く昔者堯は舜を天に薦めて而して天之を受け之を民に暴げて而して民之を受くと又曰く堯は民天に歸ぜしを子曰く然なり堯は其れ主德を謂わへきかな三たび天下を以て讓る高尚なる而して歸する無しと

第二十四章　終始經

終始は德澤を後世に及ぼす所の聖人の道である

之には始め終りの順序がある中庸に曰く天の命之を性と謂ひ性に率ふ之を道と謂ふ道を脩むる之を教と謂ふと故に性に率ふを道を脩むると教を重ずるは三段の順序である

率性は現在一時に於ける行ひの道である脩道は生涯に於ける行ひの道である而教は後世に於ける行ひの道である

教の死後後世に於て事を行ふと云ふのは鳥獲に同じ保し現在の一時に於て為す所のことは因果の道理に拠て後世に及ぼすものである此因果の道理と云ふのは前に原因のあれば後に其結果のあることは疑なしのこと千百歳は愚か未来永劫になるまで絶ゆることはなしのことである

中庸に曰く君子の道は辟へは遠きに行くが如し必ず邇きより
辟へは高きに登るが如し必ず卑きより大事業も其根原
は全く現在の一時に在らざるを待たず而して一時をよくすること
の出来ぬものは生涯をよくすることは出来ず生涯をよくすること
の出来ぬものは後世をよくすることの出来ぬは勿論である
斯のごとくして終始託は率性と修道と尊敬との三大目に分れる

一　率性篇

率性は現在一時に於ける行ひの道である
中庸に曰く天の命ずる之を性と謂ふと我々の性は天賦である性に率
ひて之れを行ふのは我々は其天賦の性能の通りの行をすることであるが
本来ならば何をしても道に叶ひ性に率ひて居るべき筈である生
れたばかりの赤子は乳を吸ふ事を物を摑む事を泣く立つ歩
行く危険な所は避ける目の前のことは怠りて注意する悪いことは
控える謹りて謹慎もするのである
然るに此注意も謹慎も種々の妨害より不注意不謹慎の行を為す
に至るのである道に外れた危険なことを一寸の間なれども為めり
又為ぬ日さなかりし一寸道れに明日より業を云ふ様な因循姑息な
禮記に曰く今日學ばずして明日あらと謂ふことなれと一時の行は
如ず現在となりてはならぬ一時間の猶豫も許されないのである

二　修道篇

修道は生涯に於ける行ひの道である
之は現在一時の積累である然るに之は離し難し現在を思ふ如く生涯の
ことを思はれしものはなし故に修道は矢張り天性の発揮である天性
の発揮は即ち聖人の道と行ふと云ふ所の志焉自身である孔子曰く

吾れ十有五にして而して學に志すと曰へり是れ害なるのみと雖ども士たるに於て孔教ならざるべからず任重くして而して道遠し仁以て己が任となす亦重からずや死して後已むの道かゝるかと一時の躁情の徳の充たる生涯の勤敏の徳である

然るに是も和れ孔聖の為めに殺げんと謂なる能はずして情熱となるのである聖人の志を止めて情火の行を志すとする而も情火の惹事を事を得る勤敏のみ見る場合多い場合なる天下騒然りとあるれども吾れ未だ聞なる者を見ず或人曰く申棖と云へり

三　金教篇

金教は後世に於ける行ひの道である

我々は過去仏々の祖先より到底報い得られざる所の大恩を蒙りて来て居る然るに我々も後世子孫の為めに有益なる事業を此世に遺すことは我々の義務と云はねばならぬ孔子曰く義を見て為さざる勇なきなりと故に後世の為めの行ひ道は勇の徳である

保し斯く権利義務の現実に走らずして我々には聞達を注意し生涯を憂ふるかの如く後世子孫の上を思ひ為りのはない之は我々本来自然の性情である故に後世の勇の徳は大張り一時の躁情生涯の勤敏の徳の発展充たるものに過ぎない

此後世に対する勇の徳は我々の志望である此志望がなくて我々は毀誉褒貶を意に介せず生死も長れず死して後世にも長く人々の口碑に伝へる聖人となるのである聖人となつても得て竟に尭舜の如

我々は過去仏々の祖先より到底報い得られざる所の大恩を蒙りて来て居る然るに我々も後世子孫の為めに有益なる事業を此世に遺すことは我々の義務と云はねばならぬ孔子曰く義を見て為さざる勇なきなりと故に後世の為めの行ひ道は勇の徳である

保し斯く権利義務の現実に走らずして我々には聞達を注意し生涯を憂ふるかの如く後世子孫の上を思ひ為りのはない之は我々本来自然の性情である故に後世の勇の徳は大張り一時の躁情生涯の勤敏の徳の発展充たるものに過ぎない

此後世に対する勇の徳は我々の志望である此志望がなくて我々は毀誉褒貶を意に介せず生死も長れず死して後世にも長く人々の口碑に伝へる聖人となつても得て竟に尭舜の如

さ大石と走せなくる聖人たるに於て何の完全もない實は貧さへ
く名は異さへさりのとある

第二十五章　率性巻

率性は現在一時に於ける行ひの謹慎の道である
中庸にはく或は安んして而して之を行ひ或は利して而して之を
行ひ或は勉強して而して之を行ふと私るはく之を知る者は之を好
む者に如かず之を好む者は之を樂む者に如かずと之は謹慎の德に
も大中小の三条件のある所にてある
勉強して而して之を行ふとは「身を以て」一時の身を行ふ
所の小慎である好み利して而して之を行ふとは「心を以て」
一時の心を行ふ所の中慎である安んじ樂んで而して之を行ふとは
之は我意を以て一時の意を行ふ所の大慎である
斯の如くして率性は小慎と中慎と大慎との三条件に分れる

一　小慎

小慎は我身を以て現在一時の身を行ふのである
中庸に曰く道は須臾も離るへからざるなり離るべきは道に非ざるなり是の故に君子は其睹ざる所を戒慎し其聞かざる所を恐懼す隠れたるより見はるゝは莫く微なるより顕かなるは莫し故に君子は其獨りを慎むなりと人の見て居る所が大切である人が見て居らぬからとて悪い行ひは善い行ひとはならぬ悪い行ひは人が見て居らぬとしても其丈の害毒を天下に流すのである
故に行ふへきことは何うしても行はねばならぬ心が進まず厭々ながらも身を以て之を行はねばならぬ即ち勉強して而して之を行ふと云ふのである

二 中慎

中慎は我心を以て現在一時の心を行ふのである
同じ為すにも厭々ながらするのと好んでするのと違ひがある既に行ふべきことは何うしても身を以て之を行ふ以上は厭々ながらするよりは好んでする方は先づ我々の利益である加之結果の上にも違ひがある厭々ながらした仕事は悪るく出来る好んでした仕事は良く出来るのである
尚且つ好んですれば少々の妨害などは何の差支にもならぬけれども厭々ですれば少しの妨害があつても其を機会に行はなくなるといふ様な憂がある

三 大慎

大慎は我意を以て現在一時の意を行ふのである
孔子曰く七十にして而して心の欲する所に従ひ矩を踰えずと朱熹の註に曰く安んじて而して之を行ひ勉めずして而して中るなり

と安んじ楽んで而して之を行ふは知者行ひて仁に安んずるものである

之れには何の障害もなく山か又無のから山かた様なことは一向頓着がない何の世にもなるさいのみか寄つて面白い位のものである全く世事に豊中になつて底境遇と勉強せすとも自然に行なはれる斯らなることを知つて止めますに習ひ析れる

要するに我意を自己と共行ふ所の事と仕最早別るの道つたものとなく我は其れが其れは我のものなる様に全く融合一致した仕事つれりつてある

第二十六章　修道篇

修道は生涯に於ける行ひの剛毅の道である

此剛毅の德は謹慎の德の擴充である謹慎に小慎中慎大慎の三等位のある通り剛毅にも小剛中剛大剛の三等位がある

小剛は我身を以て生涯の身を行ふのである中剛は我心を以て生涯の心を行ふのである大剛は我意を以て生涯の意を行ふのである

斯の如くして修道は小剛と中剛と大剛との三等位に分れる

一　小剛

小剛は我身を以て生涯の身を行ふのである

孔子曰く士道に志して而して惡衣惡食を恥つる者は未だ共に議るに足らざるなりと惡衣惡食とは義衣義食でないことである衣食住は身体の健康を保つて行けれは其て十分のものである然る所

語なる者は其程度を低くして寡欲安逸を貪り求つて之を以て生涯の目的とするに至るものである此等は到底聖人の道を語するに足らざる者である

孔子は聖人の道に志すに上は生涯寡欲安逸を貪つてはならぬのである

二　中則

中則は新心を以て生涯の心を行ふのである

孔子曰く朝に道を聞いて夕に死すとも可なりと聖人の道を聞いて生涯今死ぬまでも之を学ぶと云ふのである元来聖人の道を学ぶと云ふことは新たに天性を求めるから本来なら何の嫌いもあつたものでなく又別に為めにする訳のある譯でなく偽善今死ぬるかもしれぬと云ふ事を聞く必要のないなどと云ふことはないのである蘆

へば今にも死ぬるかと到つて居なかも矢張り我身の為めの飽食に注意せねばならぬと同様なものである可なりとは若此上に大則のことを示したものである

然るに世間多くは新を本来の天性と失ひ死ぬる際は是が本来と誤る聖人の道を学んで之を顔みない のである禮記に曰く玉琢かざれば器を成さず人学ばざれば道を知らずと所謂人材となるべきの云を俗にいふ学問に立を規設しまつて覺らないのである

三　大則

大則は私意を以て生涯の意を行ふのである

孔子曰く予れ学て厭さずと云ふ立は始さの以上にて生涯安心し学んで行ふのである論語に哀公は問ふ弟子孰か学を好むと為すかと孔子曰く顔回なる者有り学を好む怒を遷さず過ちを貳にせずと

章經余にして死せり今や則ち亡し未だ學を好む者を聞かざるなり
と此顏回のほかとこゝのは其学義に拘泥してはならぬ之は實は好
学のことを安んじ樂んで行ひ得るのである
れ子顏回の二大人物の德行は等しく此域に達したのである
後世程子は顏回を評して曰く顏子のみは堯舜聖人と云ふ
只聾聖の間つみと

第二十七章　毋敬卷

毋敬は後世に於ける行ひの當德の道である
此當德は謹慎剛毅の擴充であるから謹慎剛毅に大中小の三条件
がある而し當德には小當中當大當の三条件がある
小當は形身を以て後世の身を行ひのべてある中當は形心を以て後
世の心を行ひのべてある大當は形意を以て後世の意を行ひのべてある
斯の如くして毋敬は小當と中當と大當との三条件にわかれる

一　小當

小當は形身を以て後世の身を行ひのべてある
之は後世に於ける衣食住に関する殖産
事業のみをいふ所の體育である之後世の衣食住に関する殖産
事業のみをいふ所の洪水と云ふ如きの事業を要するに後世の
為のにする一切の有形的の事業は全部此内にのるのである

此等の事業が自分の事として出来る訳には行かないから矢張り
自分の事先として行はねばならぬ孔子につく真実正しければ今日す
して所を行はれ其身正しからざれば令すとも誰も従はず

二　中庸

中庸は私心を以て世人の心を行ふのである
之は後世に於ける所の智育である即ち人物の養成である孔子曰
く西と所して作せず信にして所して古を好む竊かに我老彭に比す
と朱熹の註に曰く孔子は詩書を刪り禮樂を定め周易を贊し春秋を
修す皆先王の舊を傳へて所して未だ嘗て作する所有らざるなりと
古を好むとは此等の古書を研究して更に之を後世に傳ふる
ことを好むのである
此等精神的の事業は有形的の事業に上の大事業である

三　大學

大學は私意を以て後世の意を行ふのである
之れは後世に於ける所の德育である即ち人物の養成である人間
の諸の事業中此德育即ち人物養成は最も高尚にして且つ最大なるも
のはないのである之れは此德育は實の教養真の人一教養即ち
人物の教養にして其人物こそ世界後世に於ける有形無形の總て
の事業の大原動力者大經營者大成功者たるべきものである
之れは大聖人となければ出來ないこれを曰く明德と云ひ
て德を明にし且つ安んじ後世と合一融合して其德育を行ふのである
即ち德を修する所にある故に大學は孔子に同じて曰く夫子は聖な
るかと孔子曰く聖は即ち吾れ能せず我學て厭はず而して敎て倦き

さるなりと朱熹の註に曰く孔子は誠にして誠なりと孔子の言葉は
總て其心にして誠ならぬはなしとあるは子貢曰く學ぶに厭はざるは智
なり教えて倦まざるは仁なり仁且つ智なり夫子は既に聖なりと
教えて倦まざるは大愛なることは言外に明らかなるが子貢は
之に一工夫を加へて學ぶ生ずる智と教ふる生ずる仁とを引き
出して孔子の仁智愛の三大德を取り揃えて孔子を聖人なりと論結し
たのである。

第二十八章　基督教

基督教は我が人間に神の大なる力によりて天國に救ひ上げて貰
はねばならぬと云ふのである。

之れには歴史上の由來がある其由來は耶蘇の降生を界として其
前の舊約紀と其後の新約紀とに分ち舊約紀は上古バの神の此世
界を作り上げて休息したる日を界として其前の創世紀と其後の
常に舊約紀とに分つことが出來る

偖しながら我が人間の救濟と云ふ基督教の目的を標準として云
へば創世紀は過去の由來に當り舊約紀は現在の由來に當り新
約紀は未來の由來に當るのである

斯の如くして基督教は創世紀と舊約紀と新約紀との三大時紀に
分れる。

一　創世紀

創世紀は過去に於ける所の由来である

之れは世界の開闢天地萬物の始まりである此天地萬物は神によつて造られたものである神の外には世の中の物と造り且つ之を動かして行く力のあるものはないのである

人間も無論神によつて造られたものである即ち人間の本生永に真理化は共に神の力である係し創造された當時の人間は罪に造られた彼の天真爛熟たるものであつた

のである丸なる事常の時代である

二　舊約紀

舊約紀は現在に於ける所の由来である

世界の目下の状態である

我々人間の性はもと善も悪もなかりしかむも善となり悪となり得へきものであるは是より何れかになるはなるべきはなるべきかの筆の善となる人為選定であつたのの善に為らずして悪に堕ちた即ち人性堕落した罪悪のものと善いたのである

斯くて今日の人間は皆罪悪に満たされて居る其証拠には良心のない者は格別為も良心の有る者なれば神に対し自ら省みて愧る所のない者はないのである善一女しも愧る所のないものならば通徳家殿も基督殿も今日に於て何等の必要もないのである ヨハネは人間を蝮の類なりと悪口し耶蘇は縦令の人間は罪悪のものなりと叫んで居る

故に此舊約紀は我々人間の堕落一大逆悪時代である

三　新約紀

新約紀は未来に於ける所の由来である
堕落せる我々人間を向上せしめ人性霊の我々を人性善に統へし
此世界を天国に作り上げんとする所の理想希望目的である
悪に陥つるは容易であるが善に帰することは容易でない所のみならず之は我々人間の自分のかてには出来ないことである我々を造つた神のかてなければならぬ馬太傳に曰く耶蘇の母マリヤ聖霊に感じて妊みしが主の使者ヨセフの夢に現れて曰けらく彼女は子を生む其名をイエスと名くべし蓋その民を罪より救はんとすればなりと斯くて耶蘇は神の力の結合者となりたのである
故に新約紀は我々人間の向上すべき順善の時代である

第二十九章　創世紀

創世紀は我々人間の造られた代の過去に於ける異常の時代である

此時代に於ては人間のみならず一切の萬物の造られたのである
創世紀に曰く神は天地を創造りたまへりと
神とは聖霊のことで異常時代の無形物である天地とは物質のことで異常時代の有形物である創造とは造化のことで異常時代に於ける有形無形の関係である
此等有形無形の区別亦に其関係は世界の構成要素であると同時に基督教に於ける最も必要なことである
斯のごとくして創世紀は聖霊と物質と造化と三大構成要素に分れる

一　聖霊書

聖霊は尋常時代に於ける無形物である
無形物は見るへからす聞くへからす唯彼主の心大
に到るものである約翰傳に曰くまた神を見し人あらす
佛しなから無形の聖霊は死物となく活物となる自ら活動するの
みならす他物をも活動にしたる能力がある故に聖霊は世の
生命である勢力である精神である自由である
聖霊は又唯一不二絶体なるものである且つ永久にして無始無終廣
大にして在らさる所なく完全にして無限なるものである

二　物質書

物質は尋常時代に於ける有形物である
物質は又肉体とも云ひ聖霊に反して目に見え耳に聞え其他五官
に感觸することの出来るものである
けれとも物質は死物にして活物でない他を動かすことの出来ぬ
は勿論自ら活動することの出来ず他より動かさるに依りて
始めて動くことが出来るのである
物質は又唯一不二ではなく多數にして個々別々である其存在は
不滅である且所在は一ヶ所に在れは同時に他方に在ることは能はさ
る不完全にして有限なものである
聖霊と物質とは斯の如く事毎に互に反對の性質を有して居る
のである

三　進化書

進化は尋常時代に於ける有形無形が関係してある
聖霊と物質とは互に反対の性質を有しながら互に両立せさるか

のみはなく却つて互に反背の性質を有する所の有形は無形を待ち無形は有形を待ち互に相待つて其用を為し其効を顕はすと雖も両者とも孤立の存在とは何ら仕様のないものである

凡ち死物である所の物質に活物である所の聖霊が働いて此の世の中が出来上るのである斯くて活物なる諸天体は運行する無生物の空気に風が吹く水が流れ死屍に腐さざる草木含獣異貴の類は動いて之が生長を始める

茲に云ふ造化は過去に於ける世界の創造のことなれども世界の創造要件から云へば過去も現在も未来も其間に何等の区別はなく等しく有形と無形との実体より成り立つて居るのである

過去に於いて成り立つた所の有形無形の造化は其依現在に存続し尚又未来に至つても過去現在に於けると同じく有形無形の造化が存続するのである

第三十章　聖靈書

聖靈は昇華時代に於ける本来其体の無形物である。

約翰傳に曰く太初に道あり道は神と偕に在り道は即ち神なりと

道とは神と云ひ偕に在りとは云ひ又同一なりと云ふ所には此等は

別物のやうに云へて結局同一の聖靈とあるかくてある唯其聖靈の本

源を指しの其本源より流れ出でたる中流を指しの其全く外部に現

はれ出でたる末流を指すに過ぎず従つて其意義も異なるのみ敢て論

理学に於て同一文字の意義が其定義と内容の意義と外延の意義と

に区別さるゝと同様である

神とは聖靈の本源たる真の神にして聖靈の本実義である道は即

ち神なりとは道と神とを一所にしたりて其実神しもはかず道と

はけだし其中間の神意の神霊ともいふべきものにて聖靈の内容

なる道とは全く外部に現はれあてたる結果の道現にして聖靈

の外延義である

斯のごとく聖靈は真神と神霊と道現との三様の意義に分れる

一　真神

真神は聖靈の本定義である

聖靈の大原因大中心大本源奥の説である動いて神霊となり表一

て道現となるのである

然る人間は神を指して天の父と呼び自ら神のあなどし称して居

る基督は新らしくある創世紀に曰く上あばつ神は人を創造り生氣を

其鼻に噓き入れたまへり人命ち生靈となりたと云ふ知る人間の他

の動物植物と異なる大特権を享有して居る所以である他の動植無生

は自己に外の神の所為によりて動いて居るに過ぎず神の結果の

道理に支配されて居るに過ぎない。然るに彼の人間に主らんとは其本
た絶界となりさる本源の生命と分無きられ生命となりて自と活動
するの自由かあるのである
故に彼の人間は神の大聖霊より分はせる所の小聖霊である神の
分身である神の子である

二　神意

神意は聖霊の内容である
神の意思即ち神の心である神より流れ出て更に発して道理となる
べきものである故に道理の上の道理である喩へは琉神の上に
も琉神かあるべく即ち寓話とか説例とかいふる様なものである
尼様なる神意即ち神の心は何なりのものなるかと云へは其れは愛
である即ち和合して一に統一するに在るのである

然らば神は故らに自分の外に人間を作りて之に聖霊を分無し
たのは瞳者の様に見えるか実は瞳者にあらず却て愛の為めである統
合の為めである之は恰も純に曰く神言はれたる人けるは我等
人を造り立に論へ吳と天空の鳥と家畜と全地と地に匍ふ所の諸の
昆虫を造れ之の如く即ち聖霊の分無は人を神の使として一切
の萬物を治めしむる為めである故に人間の職責は実に重大なる
のである
と聖霊は唯人てあるから無限のものて之を分ち減せさる
のみならず却て増えるものと喩へは火の如く智識の如きものである
之喩へは一本の幹より無数の枝分れ出る様なものである
斯く我と人間は聖霊を分無されたに上其位なるは自分の自由に
道理を制定するの権能かあるへき筈である然るか其れは統一の必要上

厳禁されたのである即ち王政の国に中央集権の一大憲法が立てられてある其れは善悪を知るの樹である善悪は道理である知るは立を利ち定さることである此の国の中央に在る善悪を知るの樹の葉は立と金十へかくす斯くて善悪道理を制定するの立法権は厳まれも神の手一つに留保されれのである

三 道理

道理は聖霊の外延である

道理は神意より更に外部に発現せるもの即ち神意の発表にして神の金言である又神の行為である

此道理なるものは道徳に関するものは善悪であるか廣く云へば物理上の原理原則に至るまで総て此内に含まれて居るものである

此等の道理は其種類其数のいくらあるとも互によく融和適合して更に抵触することなき所にのみのは其本源の神が唯一不二であるからである又此等の道理が古今将来を通して不変不動である所にのみのは其大原因たる神の無始無終なるが為である又此等の道理が宇宙到る所間隙無きものである道理とは其大中心たる神の廣大にして在らさる所なきが為である又此等の道理が一切の事物を支配して少しも誤る所なき所にのみのは其造物主たる神の完全にして全智全能である為である

第三十一章　物質書

物質は普常時代に於ける本来其体の有形物である

創世紀に曰く地は定形なく曠空くして黒暗淵の面に在りと之は物質の三様の意義を示すものい一例である

地は定形なくしは未だ何等の形状をも具へざる物質の本質を示すりて物質の本定義である曠空くして黒暗とは物質の一の性情を示すりて物質の体色義である淵の面とは既に形体を成したる一の物体を示すりにして物質の外延義である

斯のごとくして物質は本質と物性と諸物体との三様の意義に分れる

一　本質

本質は物質の本定義である

物質の根元にして未だ何等の形状にも現はれ出てざる所の母胎を云ふりてある本体とも云へば素質又は元素ともいふ

此元素には程度かありて元素の元素なるものもあるか今は其所まで研究するの必要なく唯普通に到りて居る所の土とか風とか水とか火とか云ふ迄の程度で嘗に所謂本質であると見立てし置い

創世紀に曰く土おバ神は土の塵をもて人を造り云々とありて我人間は無形の方面に於て聖霊の宮勇であると同時に有形の方面に於て物質の土より成る所云ふて居る故に我々は聖霊の方面に於て神を天の父として尊敬する様に物質の方面に於て土を地の母として感謝する所のものとなりて居る

二　物性

物性は物質の内容義である
物質が其本質より外部に現はれて形体を具するに至るまでの性
情である例之は色声香味觸の類である
此等は神経の感の統一と反射と嫌悪嫌怨命製能誰の傾向を有し
且つ又合すれば大となり分かれては小となり一方に増せば他方に減
じ一方に減ずれば他方に増さざるを得ざるものである

三　諸物体

諸物体は物質の外延義である
物質の表面外観である其大なるものは日月星辰等の諸天体より
下は草木等獣畜物の類に至るまで凡て何等か形体を具有するも
は總て皆物体である
此等の物体は假令如何なる性質か如何なる装置か施こされまた
もせよ其自身本来の死物にして自ら活動することは出来ない
となりて絶体に出来ない之れ人間の身体も亦た矢張り
同一の物体にして全く醜悪なる死屍腐骸に過ぎない

第三十二章　造化書

造化は平常時代に於ける有形無形の結合関係である

創世紀に曰く神の霊は水の面を覆ひたりき神光なれと言はれけれは光ありき神光を善と観たまへりと是も亦造化の三様の意義を示すもの、一例である

神の霊か水の面を覆ふれのは造化の時に於まらさとする世の開発の一例と造化の本定義である神光なれと言はれ一りとは造化の進行を記して居る世の合会果敢の一例と造化の合会義である光ありき神光を善と観たまへりとは造化の既に完成せる森羅萬象の一例と造化の仏近義である

斯のごとく造化は世の開発と果敢と森羅萬象との三様の意義に合れる

一　世の開発

世の開発は造化の本定義である

聖霊の神か物質の本質に基づて為す所の訓用である創世紀に神は六日の間に諸物を造つて七日目に休息したとある此一日二日とゝかのは唯第一第二の順序を示すのみにして時間の長さとはない時間にすれは今の一晝夜とはなく非常に永い間のことになる

初め人間は最強の第六日目に造られたりとある為に特に注意せねはならぬことは前にも述たごとく初め人間は諸他の諸物より聖霊の為めに動いて居る単純なる物質と異にして各其上に更に聖霊の一部を分與せられて特別に霊なるものとなつて居ることである斯くて初め人間は霊なるものとして物質と支配と立て訪へて行く一世地位に置かれ大なる職責を負はせられたのである

太の創世紀の當時は漸く造られて出来たばかりの所で未だ物質の支配に取り掛らず、のみ徒に苦もなく樂もない有様であるから是れより進むべき愈々其職責を尽すべき約紀の時代ではのり其支配すべき物質に臨むべき秘法人間は是れを開切するか失敗するかは全く未然の問題に屬するのである

二　聖教

聖教は造化の内容事である

物性の奥を分析に對し神意の唯一統合の作用と為に合聖教の起るのである

創世紀に神は萬物を造るに各其類に従って立て創造り云へりと書てある故に神は同様のものを種々別異のものにしかしてなくも

と種々無限に別異であれりのと同様のものに類集したのである

即ち神は何も無かった所へ無因矢鱈に物を拵え出したのでなく始めのより物が無限無数で互離風裂で何が何やら一向譯が判らなかったのを順序よく整頓したのである

殊に初めて人間に事りては類を神と等しかるべき立に聖霊とさへ名無したのである神言はせくけるは我等に象りて我儕の像のごとくに我等は人を作り立に一切のものを統べしめさと神其像のごとくに人を創造られ男と女とに創造られたり

神の心とは真心と為し神の行動所とは人間は

とと云ふのである

三　森羅萬象

森羅萬象は造化の外延事である

聖霊の道理が物質の諸物体に作用されて森羅萬象を現したる

のたまふ

四く光を晝と名け暗を夜と名く是れ首の日なり穹蒼の下の水と穹蒼の上の水とを別ち穹蒼を天と名く是れ二日なり乾ける土を地と名け水の集合を海と名け地は青草と其類に從ひ實蔵を生ずる草蔬と其類に從ひて種ある所の樹を発出せり是れ三日なり二の巨なる光を一より大なる光に晝をわさ光に夜を司らしめまた星を造りたまへり是れ四日なり魚と水に饒に生ずる諸の生物と又羽翼ある諸の鳥とを其類に從ひて創造りたまへり是れ五日なり地の獸と家畜と諸の昆虫とを其類に從ひて造りたまへり又神の像のごとく人を男と女に創造りたまへり是れ六日なり第七日に工を休て安息たまへりと

加之私たる人間を特に霊のものとし神の心を其心とし神の行を行ふ一き多の事に約束を與へられたるおのれ神にく他を服従へよ又海の魚と天空の鳥と地に動く所の諸の生物を治めよ或合他の面に在る實蔵のなる諸の草蔬と核ある水菓のなる諸の樹とを諸者に與へ

これは諸者の糧となるべしと

斯うこの約束が出来た是より小分霊の私たる人間が此約束に從つて愈々物産を殖やす事に取り掛らねばならぬのである

第三十三章　舊約紀

舊約紀は我々人間の墮落と現在の逆惡時代である

其大要の事實は我々人間は肉体の慾に眩惑して神の命令を犯し

種々の神罰を蒙りつゝあると云ふのである

我々を眩惑せしめた所の肉体慾は物質の惡魔にして逆惡時代の

有形物である神の命令を犯したの重罪に對する所の犯罪にして

逆惡時代の無形物である種々の神罰を蒙りつゝあるのは造化の他

獄にして逆惡時代に於ける有形無形の関係である

斯のごとくして舊約紀は惡魔と犯罪と他獄との三大構成要素に分

れる

一　惡魔書

惡魔は逆惡時代に於ける有形物である

我々人間は肉体あるが爲めに物質と他の母として悪い慾の傾

向のある其れを防げばさて物質が悪長跋扈する教祖の耶蘇は聖靈

の尊さ一を大味すると同時に口を極めて肉体の卑さへさと絶叫

し之を指して惡魔と稱したのである物質はもとより醜陋なる死屍である

其れが我々人間を眩惑する所の肉体慾と現象するに於ては耶蘇

の云ふ所は至極尤である

耶蘇のごとき大聖なれば惡魔の討檢にも大丈夫であつたけれども

我々のごとき善道の人間に於ては微弱なる小靈に過ぎざるが故

惡魔の誘惑に陥ることが出来なくて見事に落第に及び其の動機

となりて市来我々は愈々醜陋なる肉体を無上の美として尊重崇拝

さるに至つたのである

二　犯罪書

犯罪は逆悪時代に於ける無形物である

初め人間はもと神より分離されたる聖霊を共にしては居たけれども其れは一小分霊に過ぎざるが為め神の如く完全なる業の出来ない弱点があり偶々悪魔の誘惑に陥落してもう肉体あるを知らず聖霊の尊さへさを忘れ天の父なる神より命せられたる大憲を無視し善悪を知るの樹の果を取り食らひたる事実に聖霊に対する大逆無道の犯罪である

初めの始祖が神の大憲を無視してより以来子々孫々の者共に至るまで皆其犯罪を遺伝し何れも善く善悪を知るの樹の果を取り食ひ続に人性罪悪の者と化し去つて了つたのである

三　地獄書

地獄は逆悪時代に於ける有形無形の関係である

有形の物質が尊く無形の聖霊が卑しいと云ふ不正等の関係は分自の如く物質が聖霊を支配すると云ふ逆悪にして順善に反するの道化で世の中が疾病不具の有様に在るのである

之は初めの犯罪に対する神罰と言を換へて云へば犯罪の当然の結果即ち自然の制方である

第三十四章　悪魔書

悪魔は逆恵時代に於ける尊重された無形物である

旊約書に曰く蛇は婦に言けるは決して死ぬる事あらじと婦は樹を見れば食ふに善く目に美麗ほ〻樹なりと

婦イヴに物言ふ所の毒蛇は害毒となれる本質にして悪魔の本定義である決して死ぬる事あらじとは物慾の誘惑にして悪魔の内容である食ふによく目に美麗ほ〻樹なりとは内体の榮華にして悪魔の外延義である

斯の如くして悪魔は害毒と誘惑と榮華との三様の意義に分れる

一　害毒

害毒は悪魔の本定義である

即ち悪魔の正体である蛇に喩へられてある旊約書に曰く神の

造りたる一切の生物の中に蛇最も狡猾しと物慾は神の大要に反抗する ことが出来すと創世紀の約束によりて我々人間に訪めらるへきものなるを知らしめ立に反抗して斯の如きの害毒は我々身体に外の物慾にのみあるのではなく我々の内体其ものが全陽り害毒で悪魔つ毒蛇が我々身体の内にト其業度を構えて居る若かる此身体内の害毒は獅子身中の虫で身体は外の害毒よりも却って強烈にして制し難い所がある

二　誘惑

誘惑は悪魔の内容義である

悪魔の詐欺手段である我々人間は何と食ふ度い何か欲しい見度い聞き度いと云ふ様に物慾は我々身体つは外に相呼應して其誘惑

を置かして居る。

斯様な傳説は立を制御せざる限り我を人間を罪悪に陥落せしむることは分論を待たず、時者児の如くなりしわ者堂の始祖は義に此果むへく悪むへき物性に時惑して立を尊重崇拝するに至つたのである。

三　榮華

榮華は悪魔の外延義である。

悪魔の化け遁として居る外觀である飲食衣服住居を貴め金銀珠玉、財宝より富貴権勢名誉等の類である

罪悪に陷いれる人間は此等に誇りて満足を得ばず立が為の為と為さゝる所なりと有様である。

第三十五章　犯罪書

犯罪は迷悪時代に於ける檀床された無形物である

舊約書に曰く婦は樹を見れは智慧しからさるが為に慕ふへき樹なりとして遂に其果実を取て食し亦立をも与へて食せり夫に此二人は此食一り是に於て彼等の目偶に開て彼等其裸体なりと知り乃ち無花果樹の葉を綴りて裳を作れりと

已れ智慧のくさとする所は父なる神を侮蔑し立に背くなり犯罪の本定義しなる樹の果を取りて立と食つたのは神意に違背したのである犯罪の性質である彼等の目開け無果花樹の葉を綴りて裳を作つたのは無理非道と称するのである犯罪の外延義である

斯の如くして犯罪は背神と神意違反と無理非道との三様の意義に分れる。

一　背神

背神は犯罪の本質である。

之は犯罪の遠因である我々は肉体あるを知って精神あるを忘れ天の父なる神を棄て之を離れ之と隔絶した結約書に立おば神は我々をエデンの園より出しとあるは愈々天国より追放されたのである我々は神の子にして最早神の子となくなった之は即ち動物されたる神となるである。

我々は此霊のみにて生存する能力なく神と離れては其能力なく聖霊の火は既に我々の内に燃えて居ないのである燃え殘りの炭火に過ぎざるものとなった斯くして今や道理の行使能力は恩寵の聖霊の享有能力てさへ危殆に陥って居るのである

二　神憲違反

之は犯罪の意思である意思を知るの樹の果を取り食ったのは神の一手に留保されたる立法の大権を簒奪したりのである明かなる神憲違反である即ち我々人間は神を忘却して己れ立法者の地位に立ち各自に自己勝手の憲法を定めたのである

斯くて人間は神に対し謀叛の旗を擡げて獨立の宣言をしたのである敢て始祖のアダムイヴのみならず始祖より繁殖せる所の子孫々々は皆此憲法違反を遺傳し伝れり。自分勝手に立法を為しつゝあるのである尤も此神に対する我々の謀叛は敢て人間の徒党を組み一致團結して神に対抗すると云ふのではなく唯個人々々別々に獨立したのである。

三　無理非道

無理非道は他人の外道事である

之は他人の所為である神の定めた道理の善悪は之を取り棄て全然顧みず或は各自勝手に道理を想ひ付け善悪を拵え出して之を行ひつゝあるのである

故に其所為は永久全部の為めなること、云ふことは更になく皆自己一人の利利利慾に基さたるものにして身体上の快楽を榮華と誇り官爵に驕り権勢を伸み所謂道徒と意ひ且つ斯のめさりの大なれは大なるほど善の大なるものとして立て行ふのである

故に又神の定めた道理善悪とは全然反対轉倒して居る若かも程ちがひて曰く現実と実際とは違はねばならぬとか立斯のめさ轉倒の道理は千人は千人萬人は萬人悉く皆別個のものとして甲のと乙のと互に相合致すると云ふかめさ場合は更に無い故に豈悉に轉倒のみなるもやとする謂裂四出到らさるなく支離滅裂収拾し得へからさるものである

第三十六章　地獄書

地獄は迷悪時代に於て有形物か無形物を支配する所の関係である

舊約書に上ホバ神は我々の祖に告て曰く汝は一生の苦して其より食を得ん土は荊棘と薊とを汝の為めに生ずべしと

一生の間の苦は大なる苦痛と地獄の本定義である土より食を得ねばならぬは生存競争の為め相互に方策懶怠するのと他獄の怪奇である土は荊棘と薊とを生ずるは詐偽詭計の為め相互に争闘する所の有様と地獄の外定義である

斯のごとくして地獄は苦痛と懶怠と争闘との三様の意義に合れる

一　苦痛

苦痛は地獄の本定義である

神より聖霊を分與せられたる我々は愈々物質を欲するのみ為めに立に陥られ我々は読者くある主人である物質は被読者である奴人である

然るに無能力者なる我々人間は偶々一歩を踏み誤りて親族非親族有の神を離れ此れが為めに我々は読者たり主人たるものか却つて被読者たり奴人たる物質の為めに征服せられ其痛に伴服して従順なる臣下となりた結に於て我々の高尚なる精神か衆醜なる肉体の奴隷となりて其支配人に其痛と忍はねばならぬことになりたのである

聖太傳に曰く国の諸子は外の幽暗に面出されて其所にて哀号切歯することあらさんと而も今や此苦痛を脱せんとしても我々自力にては到底脱出することか出来ないのである

二　懶怠

憤怒は地獄の体色養てある。

精神は身体の奴隷となり之れに虐使せられて物の屋もないのである。物質は有限てある之を取れは陽加すると之を與へれは減少する然るに身体的慾望は物質的榮華を亟ふて止まないのてある。第一に先つ之を得

第三十七章　新約紀

新約紀は我々人間の向上すべき未来の頑喜時代である

馬太傳に新約の要旨が述べられてある曰く此時よりイエス始めて道を宣傳へ天国は近づけり悔改めよと曰たまへりと

道を宣傳ふる所のイエスは聖靈なる神の使て頑喜時代の無形物である悔改めよとは我々が是までの物理上の罪悪を懺悔することで頑喜時代の有形物である近つきたる所の天国は基督教の大目的である死恐の道化で頑喜時代に於ける有形無形の関係である

斯のごとくして新約紀は神使と懺悔と天国との三大構成要素に分れる。

一　神使

神使は頑喜時代に於ける無形物である。

神は無数の預言者を人間に降したまへども其一人である曰く我より後に来る者は我に勝りて能力あり彼は聖靈と火とをもて汝を浸すべしと之は耶蘇のことである神の子として神と人間との間の紐である神は我果て、在る人間に大聖靈の雨を降らしたまへる我々人間は此形式をもて神に近つくことが出来るのである

苦痛の中に沈める我々人間が自分の力で之を脱することが出来ないで居る為め神は其大愛大能の救ひの手を伸ばしたまへる故に神使は聖靈とされたる所の聖靈である

二　懺悔

懺悔は頑喜時代に於ける有形物である

懺悔とは普通に口でいへば嘆々悪いことをしたと云ふ文のことで

はない。四つの懺悔及び行の上の懺悔とある言葉を換へて云へば、地獄の苦痛に堪へ得て神の有りかたさを知り此後再び悪いことをせぬ所の懺悔とある。

尼様なる懺悔には是まで所々を誘惑する所の悪魔を全く撲滅排除をなければならぬ必要がある故に懺悔は撲滅さるべき所の物質である。

三　天国

天国は頓悟時代に於ける有形無形の関係である。

初めの故び上げらるべき国土地である天国とは云へども敢て空中に在る訳ではなく矢張り此大地の上である稽約書に曰く卫斯神エデンの東の方に園を設けて其造りし人を其所に置さたり。天国は先づエデンの園の復活である。

偖て新たなる天国は前よりも良くなると云ふの仕前には悪魔が来たげれども今度は悪魔が最早来ない所の楽園である之れに続き地上なる空中と云ふ場所を限られ譯ではなく到る所満ちある所の神の国である天の報賞である故に天国は聖霊の物質を支配し行く所の有様である。

第三十八章　神使書

神使は煙喜時代に於ける尊重さるべき無形物である

馬太傳に曰くイエス繞く鄉邑を巡り其會堂にて教をなし天國の福音を宣傳へ且つ百の中なる諸の病すべての疾を癒ひりと

諸の疾病を癒したる所の能力は大なる信仰にして神使の本定義である天國の福音は神の委を我々の心に抵え居ける所の祈禱にして神使の本定義である會堂に於ける教は我々の運拳すべき巨細の喜行にして神使の外延義である

此等は耶蘇が神の使として我々人間に縋て新に齎らし来りたる所の聖靈である

斯のごとくして神使は信仰と祈禱と喜行との三様の意義に分れる

一　信仰

信仰は神使の本定義である

神自身は既に絶大なる信仰である信仰は又能力である故に世の中のことは皆此信仰の為す所にて信仰の無ければ如何なる改革の事も到底立ち所に得なしのである

神を離れ信仰のなくなりたる我々の前に今此大信仰が持ち来たされた神人間の隔りがなくなって我々に能力と固定すべき時が来れるんである我々は神と共に一つになり永久の大生命に入るべき時が来たのである

新約書に曰くイエスよりの一り婦を見て曰けるは女よ心安かれ汝の信仰なんぢを愈せりと即ち婦その時より愈るなり又曰くイエス舟に登りければ其弟子等も之に從へり此とき大なる風起りて舟を蔽ふほどなる浪たちしにイエスは寢たり弟子等之に近つきて醒

と曰けるは主よ救たまへ我儕亡んとす彼等に曰けるは信仰うすき者よ何ぞ懼るや而して風と海とを叱りたまへば大に平息になりぬ人々奇みて曰けるは此はいかなる人ぞ風も海も之に従いたりと

此外耶蘇は著明に見えたる、驚くべきことを為したのである彼世此等を奇蹟と称して居るが耶蘇は奇蹟を欲いたりのではないのである若し此等を奇蹟とせんなら此世の中の一切は奇蹟でないものはない、のである、イエスは曰く我まことに汝等に告ん、もし芥種の如き信あらば此山に此所より彼所に移れと言へば移るべし汝等に能はざること無かるべしと

二　祈祷

祈祷は神使の内容義である

耶蘇の祈祷の言葉に曰く天に在す我儕の父よ願くは汝の名を尊崇させたまへ汝の国を臨らせたまへ汝の旨の天に成るごとく地にも成らせたまへと故に祈祷は我々の懇願らた願と成就とが為め神の助力を仰くのみならず却って神の法欠を我々の心に聽き入れられ之を成就せしむることである

耶蘇は死期の近つくを知り祈りいひけるは父よ若かなはば此杯を我より離れ給へ然ども我心の従を願んとするに非ず聖旨に任せたまへと又曰く天に在す汝等が父の完全かなるが如く汝等も完全うすべしと即ち神の心を我々人間に持たすこと神の大愛の内を我々の心中に燃すこと神の心と色が心と一つになることである

故に我々は救はれて天国に力りたれば之を集れて仕事は休んた

訳ではなく実に神と共に神と同様に一切の罪悪を赦はせりか為め神の使となりわれにならんと云ふ役目を持つのである最も善良なる者は最も大なる罪であるから己れのみを善くして人を悪に置いては

ならぬのである

三　善行

善行は神使の外延義である

之は耶蘇の傳道の細目で神の定めた所の善悪である要するには

の愛の外新に奏実行せらるものである注意すべきことは或者は

異教の愛は神聖なりなく、之れは身体の悪慾にして全然神聖

なる愛の反対である

耶蘇曰く「聞書の敵と憎み聞書を祖ふ者を祝し聞書を憎む者を喜

視し虐迫害のりの、為めに祈禱せよ」敵味方を区別せざる所の

愛である又全然無報酬の愛である愛すること自身が最終目的である愛するが為めの愛である耶蘇曰く是故に施捨を行ふとき人の榮を得ん為めに會堂や街衢にて偽善者のなす如く紙を己が前に吹かしむる勿此秘まことに聞書に告ん彼等は既にその報賞を得たり汝なんぢ其施捨をするとき右の手の為すことを左の手に知らするな勿れと

第三十九章　懺悔書

懺悔は頃喜時代に於ける種所なれた有形物である

耶蘇は其本形の身体に於いて受けた所の三大事實がある

ヨハネにバプテスマを受けさせられた為め、まん幼と河に来れのは其一

と懺悔の本定義とある悪魔に誘みられさる為め野に往いたのは其

二と懺悔の内容義である終に十字架上に犠牲の

血を流したのは其三と懺悔の外延義である

耶蘇の如き大要に於ては此身は何れも必要なる厳れ事に過ぎな

いのである而して人間の心合理に取っては極めて必要なる緊急事

である故に耶蘇は故らに我々の為め其模範を示したのである

斯のごとくして懺悔は洗禮と試煉と犠牲との三様の意義に分れる

一　洗禮

洗禮は懺悔の本定義である

我々の罪悪の根元たる物質の害毒を洗い去るのである其大意義

が単に儀式となり水を以て身体を洗い清めることが耶蘇に而も

行はれ来つたのである之が更に後世に於て儀式の儀式となり頭

に水をなけ身体を洗い清めた体にすることとなつたのである

馬太傳に曰く斯時イエスはヨハネにバプテスマを受けさせんと

りヤ曰ふヨハネ辞みて曰ける我は汝に受くるは可なり

バプテスマを受くべき者なるに汝我に来るかイエス答ける

は暫く許せ如此凡て義しき事は我倶盡すべきなりと是に於てヨ

ハネ彼に許せりと即ち耶蘇には必要のないことなるも我々人間の

為すべき必要なる一つの手本を示したのである

・洗禮は単に儀式に過ぎないのであるか儀式のみならず儀式

と同時に真の洗礼即ち懺悔改宗の洗礼を第一の必要とするのである。これは物質と基本質とを全然立て直して排除するに在るのである

二　試験

試験の友弟は懺悔の母色義である

我々の先祖が蒙古時代の初め悪魔の試験に落ちたが新約時代の再試験に於ては是非とも及第せねばならぬ其科目として保護者まいのて盡となく夜となく悪魔が毎日間断なく来つてあらゆる誘惑を試みつゝあるのである

耶蘇が野に往いた時の同様は斯うである曰く四十日四十夜食ふ事をせず後飢えたり試さる者来りて曰けるは汝もし神のならば命じて此石をパンと為せよ又曰く悪魔がれを聖書に推のへかゝる殿の頂上に立てて曰けるは汝もし神のならば己が身を下へ投よ又曰く悪魔また彼を最高き山に携へかゝ世界の諸国とその栄華とを見せて汝もし俯伏て我を拝せば此等を悉なんぢに與へんと曰ふと

之に対する耶蘇の答案は要するに人は神によりてのみ生くるものなりと云ふに在るのみ一も二もなく悪魔を亟ち遠ざけて仕舞つたのである

三　犠牲

犠牲は懺悔の外延義である

我々は身体上の栄華を一切悉く犠牲とせねばならぬ

獣物の如きは直先に之を棄てねばならぬイエス曰く誠に汝等に告ん富者は天国に入ること難しまた重ねて告ん富者の神の国に入